

〈DIN〉 局長のお仕事

既死稻荷

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

誰も彼もが豪傑になれる訳じゃない。けれど、彼らは非力ながらも紛れない『強者』であつた。故に人は彼らを畏怖を込めてこう称する

〈D I N〉 支部局長、と

原作に影も形もないマスターやらエンブリオやらを妄想して、じつくりコトコト書き上げました。

アイデアが思いつき次第、更新します（要するに不定期）

被らないように気をつけましたが、万が一他の方の作品と被っても気にしないで下さい。

ガバった場合はご指南の程、宜しくお願いします。

一時的蘇生&mp;リメイクしました(2019/10/13)
マルチポスト上等!!

目次

file. 1	救えない救済者	1
file. 2	賭博街裏通り奇譚	17
file. 3	これより神の視点にてお	
送りします		31
file. 4	暗躍行路	43
file. 5	天使の里	53
file. 6	墮天の儀	65
閑話 聖人と天翼		79
閑話 聖人と天翼と猛獣		94
情報まとめ		116

file. 1 救えない救済者

□ ■■■の本屋——ある本の冒頭より——

やあ、初めまして。……あれ、初めてだよね？

まあ良い、初めましての前提で話そう。私は〈D I N〉カルディナ・ヘルマイネ支部局長にして「ハイ・ジャーナリスト高位記者」のハマチ。以後お見知りおきを。ああ、別に本名が「浜地」とかいふ訳では無いから気にしないでくれ。もしも名前の由来が気になる場合はヘルマイネに来てくれたら売つてもいいよ。勿論特別価格でね。

さて、今これを見ている君は非常に運が良い。何故ならこの私の話を聞けるのだから。自分で言うのも何だが、私の情報は中々質が良いと自負している。風の噂では拳銃片手に副業P Kにいそむ「記者」もいるらしいが、少なくともそいつよりはマシなはずだ。記事にしたら売れそうだけど、さすがに身内は止めておこうか……いやすまない、話が逸れてしまったね。

ここ、『賭博都市』ヘルマイネでは掃いて捨てるほどの裏組織や権力が常日頃カルディナから蠢いている。そんな状況下では私のエンブリオは相当に『強い』。と言ってもこの国の「地

神】みたいな強さではないよ？これ以上の情報が欲しいならやつぱりウチまで来てくれ。幾らになるかは知らないけどね？

他にもこの利点としては皆が『この国では金を出せば何でも買える』って思ってくれる事なんだよね。ぶつちやければ、幾らぼつたくつても『カルディナだから』で納得してくれる。本当に良いお客さんだよ。

そんな場所カルディナでこんな地位〈DIN〉支部局長にいる私の話は聞きたくないかい？当然、別に強制はしない。無理して聞くくらいなら何も見なかったことにして、そつとこれを元の場所に戻しておいてくれ。その内誰かが読んでくれるだろうさ。いつの世も、知識は求める者に与えられるのだから――。

■□ある【賭博師】への取材

おお、読んでくれるのか。ありがたい。

まず手始めにはやはりこの街の事からが無難だろう。【賭博師】つてのはカルディナの、しかもここにしか転職用クリスタルがないちよつと珍しいジョブだね。LUCが上がりやすいのと変わったスキルを覚える以外は正直不遇職なんだが、この街に限って

言えばほぼ必須のジョブ。マスター達よりティアンの生活範囲はずっと狭いからね。君だつて海外移住なんてそうそうしないだろう？ なによりここは「賭博都市」だ。

今回そんな一人の「賭博師」に取材を申し込んだのは、新しい超級職が生まれたのを読んだからだ。まあまず間違いなく本人の次にこの事を知ったのは私だろう。

取材の予定時間丁度にコンコン、と心持ち控え目なノックが鳴る。さあ歓迎しようじゃないか。今日のゲスト、ライモンド君だ。

「えつと、こんにちは」

ふむ、賭け事なんてする者は八割方は粗野な人間だと思つていたが、どうやら彼は残りの二割らしい。

「ようこそおいで下さいました。どうぞそこの椅子におかけください」

「あ、ありがとうございます」

よほど内装が珍しいのかキョロキョロと辺りを見回すライモンド君。

「意外でした。新聞社つていうからもつと人がいるかと思つていたんですが。ここにはホンの数人しかいないんですね」

それはこの建物は厳密には〈D.I.N〉ヘルマイネ支部じゃないから。他にも一般社員を入れるには危険過ぎるつてこともある。ティアンなら尚更ね。彼らの命は一度きり、代用品は用意できないから。

「それに内装だつて意外でした。いつも賭博場にいるので、一面全部が白亜なんて壮観には慣れてなくて……」

「おや、それは嬉しいですね」

煽てられるくらいで口は滑らないが、やはり自分のモノを誉められると誰しも悪い気はしない。ましてやそれが自分自身の品位を表すようなものなら尚のこと。

「それでは早速今日の用件ですが——」

「ええ、分かっています。僕たちの先生の事でしょう？ ホントに情報が早いですね。一体誰から聞いたんですか？」

「安心してください。誰からも聞いてないですよ。あくまで私独自の情報網ですから」
そう、私しか使えない、ね。

これを聞いてもまだライモンド君は胡乱げな視線を向けてくる。マスターの、しかも得体の知れないブンヤの話なんて信用出来なくて当然か。ちなみにライモンド君はティアンだ。

「まあ私が知ってしまったのは事実ですから、今更どうしようもないでしょう？ それに、貴方だつて話すつもりで此処に来たのでしょうか？」

「……ええ」

まだ納得はいっていない様だけど、何とか話す気にはなつたみたいだ。よかつたよ

かった。御礼に口火は私が切ってあげよう。話しにくい話題の時は、お互いが『知っている』と知っている事から話し始めると口が滑りやすくなるんだ。相手も同意しやすくなるからね。ちよつとした小手先の取材のテクニクさ。

私は手元にあつた本を開き、読み上げる。

「名前はR・レプロブス。今までのメインジョブは【高位賭博師】^{ハイ・ギャンブラー}。いつも神父の格好をしていることから通り名は「娯楽神父」^{アミューズメント・ファーザー}。そして新しく就いた超級職は系統外超級職【遊神】^{ザ・プレイ}。ここまで間違いないね?」

「はい。後は一応【司祭】のジョブも持つてはいるらしいですけど……」

段々と口の滑りが良くなつてきたじやないか。補足までしてくれるようになれば絶好調だ。それにしてもレプロブス^{キリストを背負う者}か。前の「R」はキリストを背負つて渡つた川のR^{RIVER}かね? まあここまで詳しく考へてるなら、リアルでも聖職者関係の仕事かも知れないね。私? 私は仕事柄いろいろと調べるから知っているだけだよ。

「補足説明ありがとうございます。それでは始めは彼の性格・逸話などから聞かせてください」

「……先生は、高潔な人です。この街の【賭博師】達はイカサマで生計を立てているような物だけど、先生は違う。ただ運の強さだけで勝負する」

「LUCだけで? 本当に?」

「余りにも強すぎたから、一度《真偽判定》を持つ人に聞いて貰ったこともある。『イカサマを使った事があるか?』って」

「その結果は」

「『イカサマをしたことなど一度もありません。全ては御心のままに』。勿論《真偽判定》は反応しなかつたよ」

ふむ、《真偽判定》は言葉遊びの要領で切り抜けられる場合もあるが、これは無理だ。自分ではつきり断言してる。それにしても、やっぱり自慢はしたかつたんだろうな。堰を切ったように話し出すし、言葉遣いも段々フランクになつてきてる。

「それは凄い。彼を象徴するエピソードがあれば是非教えて貰えませんか?」

「一番驚かされたのは、あるマスターとのポーカーかな。相手が【高位ハイ・ペインター絵師】の新参者で、手っ取り早くトップになろうと先生と勝負したんだ。イカサマを使って」

片やイカサマ、片やただの強運。普通に考えれば前者が勝つんだろうけど——
「タネ自体は伏せたカードを書きかえるシンプルなもの。だけどどうやらエンブリオが隠蔽に特化していたらしく、その時は誰も気付かなかつた。そしてさも偶然みたいにしてトレートフラッシュを広げた」

——そうは問屋が——

「流石の先生でもよくて引き分け、負けて当然だと皆が思っていた。だけど違った!」

先生はその上、ロイヤルストレートフラッシュを運だけで揃えたんだ！」

——卸さないんだよねえ……。このゲームって時々理不尽が過ぎると思わない？

「それは、また……。レプロブスさんも凄いです、相手もよくそんな大胆なイカサマを使いましたね。後からカードを調べればバレるでしょう？」

「いや、一応カジノ側も対策としてワンゲームごとにトランプを交換するから分からないよ。カードに印とか付けられてもマズいから。ああ、《真偽判定》をされたのもこの時だったよ」

一体どれだけLUCがあるのやら……。もし1回交換していたとしても、それでも0.005%くらい。もうレジエンダリアでも逝ってきたらどうです。アクシデントサークルに巻き込まれたら財宝の前でした、とかありそうなんで羨ましい。

「なるほど、彼の凄さについてはよく分かりました。次は……。そうですね、貴方が彼を慕うようになったきっかけはなんでしょうか？」

「そんな事ですか。先生は僕の命の恩人だからですよ」

……。軽い気持ちで質問したら、予想以上に重いワードが出てきた。

「僕はね、元々捨て子だったんです。どうせ賭博が原因で養えなくなつて捨てられたんでしょ」

どうしよう、超級職誕生の嬉しいお知らせがお涙頂戴モノになつてしまう。止めない

と記事が売れなくなる。いや売れるかもしれないけど私が望んでいた物じゃない！
けどもうこれ止められる雰囲気ではないよね……。

内心でパニックを起す私に気づかないで、彼は口を止める事をしなかった。

「そんな僕に先生は手を差し伸べてくれたんです。『ここなら命の危険なく、簡単に成り上がる。キミはまだ運が良い』って。それから僕は【賭博師】になった」

彼のステータスを見るとレベルは48。ほぼカンストだった。テイアンのカンストはマスターのカンストとは異なり、相当の努力と才能を要する。

「僕を拾った後も同じような捨て子を拾い続け、やがて先生は孤児院と自立できない子が働いたための私営カジノを作った。なぜかマスターからは『ゲーセン』って言われるけど」

「ゲーセンってUFOキャッチャーとかがある？」

「そうそう、それ。他にもいろいろと先生がドライブの【エッジミテ技師】たちと協力して作ってたっけ」

……確かにこの世界にもガチャとかあったけども。そりゃ【ザ、ブレイン遊神】にもなれる。それから悪いけど私営カジノ以前の話はカットで。私があまくオブラートに包める気がしない。

それに、タイミングよく取材もそろそろ終わりみたいだしね。

だつてほら——

「ここにいましたか」

——本人が来る、いや来た。

「先生！ どうしてここに！」

「キミの居場所の情報を買いました」

まあ私自身隠してないしね。

慌てふためくライモンド君に答えるのは対照的に落ち着いた様子の背筋が伸びた老神父。身に着ける装飾品は少なく、逆さまになったスピードのトランプを貫く金の十字架を首から下げているくらいだ。

「あれほど軽々しく話すなど言い含めたはずですが？」

「す、すいません……」

一見冷静だけど、額に滲む汗にじを見ると、よほど焦っていたに違いないね。なにせノックを忘れるくらいだし。けどまあ私にとっては考えていた中で最も都合の良いルートに進んでる。最高だ。

「あの一、お取り込み中の所申し訳無いのですが……」

「申し訳ない。すぐに帰りますので」

「いえいえ違います。丁度いいので取材させて頂けませんか？ お時間はとらせません

のだ」

“新・超級職突撃インタビュー”。

話題性抜群の、実に売れそうない記事が書けそうじゃないか？

「そういうことでしたら……。キミは先に帰ってなさい」

「ありがとうございます」

そしてライモンド君を先に帰すレプロブスさん。

……本当にOKがもらえたよ。割とダメ元だったんだけど。でも、これでずつと気になってた謎が解ける。私は一呼吸置いてから、その質問に触れた。

「…それでは、貴方のエンブリオとジョブが微妙にズレているのですが、理由をお聞かせ下さい」

「……………知られてしまいましたか」

「伊達にこんな仕事をやってませんので」

そう。R・レプロブスのエンブリオはバリバリの戦闘向きでなくとも、後方支援としてかなり優れている。勿論【高位賭博師^{ハイギャンブラー}】なんかとはほとんどシナジーしていない。それに【遊神^{ザブレイ}】だってそうだ。いくら【神^{ザワン}】系統でスキルを創れると言ったって、無理矢理後から戦闘機能を追加したような歪さが残ってる。もつとも、最初に違和感を感じたのは『【司祭】のジョブを持つて』って聞いた時だったけどね。ロールプレイだとして

も必要ない。町中で回復手段が必要になるなんてあり得ない。いろいろとあべこべなんだよ、この人。

やがて彼は観念したように深く溜息を吐いてから、とつとつ 訥々と語り始める。

「ワタシは、リアルでは敬虔な神父でした。だから、せめてこI n f i n i t e の世D e n d r o g r a m界の中では思い切り『人間らしく』振る舞おうと、決めていました。この中には主を捨て、モンスターを殺し、娯楽に耽ろうと。現実からかけ離れた自我を求めたのです」

だからエンブリオが普通の戦闘向きに生まれたのか。エンブリオは孵化するまでパーソナル以外にも本人の行動を観察してそれに合った形で発現する。戦闘狂じみたプレイスタイルだったら、そうなるね。

それにしても『主を捨てる』ねえ。もしかして名前の『R』って……。恥ずかしい見当違いをしていたかも知れない、と首に吊された逆R E V E R S E向きのスピードを見ながら考える。「そんなワタシでしたが、この街に来て路地裏うずくまに蹲る子供たちを見て、思ってしまったんです。『救わなければ』と」

ああ、きつとこの人は世が世なら「聖人」と呼ばれるんだろう。呼ばれてしまうんだろう。誰かを救って救って救い続けた結果、自分だけが取り残されてしまう、正しく自己犠牲の極地。だとしたら、彼のエンブリオは皮肉が効き過ぎている。

【丘聖済民 ゴルゴタ】。それが彼の、R・レブプロブスのエンブリオ。モチーフはイエ

ス・キリストが人々の罪を肩代わりして処刑された、ゴルゴタの丘。自身への補正は殆ど無く、その代わりに味方を強化する、TYPE：テリトリ。

それにしても、彼は一体伝承のどちら側に位置するのかな？ 殺される側か、それとも殺す側か。どっちにしたって待つてるのは茨の道。こんなの、あんまりじゃないか……。

「その頃のワタシは駆け出しのマスター。子供一人満足に救えない。ならどうするか？ ここは『賭博都市』です、答えは直ぐに出ました。そして私は救うために主へ祈ってしまつた！ あれだけ捨てようとしていた主に！」

その先は聞かなくても分かる。おそらく勝ち続けてしまつたんだろう。自分が許せないのに、誰にも、それこそ神にも罰せられないのは彼のような人間には辛いはずだ。約束を1度破つたら、ずっとそれを後悔してしまう人種だろう。

「アナタにワタシはどう見えますか？ ただのゲームテイのキャラクタアを救うために、ここでは捨てたはずの信仰を道具として使い、自分の心を傷つける愚かな人間に見えますか？」

そう言いながらこちらを見つめる瞳は泣きそうで、諦めそうで、それでもまだ慈愛を湛えていた。まだ、救おうとしていた。もう自分でも悟っているに違いないのに。

「正直なところ、私に倫理や道徳はよく分かりません」

彼を突き離すようで悪いが、あいにくと私は宗教家でも神父でもなければ神でもない。

「だけど私も【高位記者】として多くの人を見て、読んで、観察してきた。そんな私にだって贈る言葉はあるさ。」

彼を救えるかも知れない言葉がね。

「だけど今の貴方は何よりも『人間らしい』ですよ」

私はね、もがいて足掻いて苦しむことも人間の特権だと思っっているんだよ。もちろん快樂だって人間らしさだろうけど、人間はそこまで単純な生き物じゃない。そうは思わないかい？

「それに、貴方の主はその程度で見放すほど狭量ですか？　というか勝ち続けてるって事は見放されてないじゃないですか」

私って現金な人間なものだから、絶対の結果でしか判断できないんだよ。

Infinite Dendrogram
「この世 界は『自由』なんです。救いたいのでしょう？　なら救えばいい。わざわざリアルに縛られるなんてもったいない」

この言葉に何かを考え、惑い続けた神父はようやく心からの笑みが浮かべる。それは

見ていて本当に清々しい笑顔。報われた、人がそう感じたときに見せる表情だった。

同時に、やっとおごそかとはちよつと異なる堅苦しいオーラがとれたのを肌で感じる。

「そうですね……。最初はワタシが【神】になるなど不遜だと思っていたけれど、アナタの言うとおりかも知れない。せつかく【遊神】なんて成れたんです。このゲームを遊び倒しましょうか」

「それで良いんじゃないですか」

まったく。私が人のためになる日が来るなんて本当に人生何があるか分かったもんじゃないね。見てるか他の局長ども、外道とかよくも呼んでくれたな。

「ああ、そうだ。聞きそびれる所でした。なぜあんなに攻撃的なスキルを【遊神】に付けたんですか？」

「それはただの護身用ですよ。ただでさえワタシは目立っているのに、その上超級職まで取つたと知られたら何をされるか分かりませんから」

……さすがに詳細は言えないが、私と同じ非戦闘職とは思えないくらいには結構えげつない仕様だったんだけど。

「じゃあもしかして記事とかには」

「して欲しくないですね」

困った。目玉のネタだったのに……。

この時、私にある天才的な閃きが降りてきた。

「なら代わりと言っては何ですが……」

「なんででしょう？」

「今までにされたイカサマ、教えて貰えませんか？ 出来れば初心者でも可能なモノを」

不思議そうな顔をされたけど快く教えてくれたよ。いやー助かった。そして私はレプロブスからの情報を基に、次の記事を書いたんだ。

もちろん、「遊神」については書かないって約束はしっかり守ってね。

【古今続在 アツシユールバニバル】第四共有書庫所蔵

『超級職の人格判断用資料②』製作者：ハマチ

※許可無く持ち出す事ヲ禁ズ

■□□■□□■□□■□□■

ってというのが今回の話だけど、どうだったかな。

今秘密を暴露したじゃないかって？ 大丈夫だよ。もう今はヘルマイネの派閥では上位の規模になってるから。カジノの王様、ならぬカジノの神様だからね。しかもお金

を貯め込まないっていうから、むしろカジノ側からはありがたがられてるよ。この街で盤石な基盤を築いた彼をどうこうしようとする奴なんてもういない。ちなみに、彼の私営カジノも繁盛してるよ。君も1度は来てみるといい。

あと、個人的には実はこの取材の後、レプロブスとはフレンド登録をしてね。たまにお茶するくらいの良き隣人として付き合っているよ。

さて、私の話はこれでお終いだ。なに、他の話が聞きたくなったら、またこの本を探してくれ。別の話を用意しておこう。それではSee you next time, and how much is your next worth?

file. 2 賭博街裏通り奇譚

やあ、また読んでくれるとは嬉しいね。

憶えているかい？私は【高位記……じゃなかった、危ない。この度【記者】系統派生超級職キング・オブ・アナウンサー【報道王】になったハマチだ。改めてよろしく頼む。

唐突だけど、少し謝らないといけないね。これ、私の持つもう一つの上級職ハイ・セクレタリー【高位書記】のスキルで書いているんだ。その名も《遠隔筆記》リモート・ライティング。文字通り離れた場所から書ける、軍の司令にも使われる便利なスキルなんだけど欠点があつてね。書き直しが利かないんだ。前の話つてウチの書庫からそのまま持つ……、いやなんでもない聞かなかったことにしてくれ、責任問題とかになつても面倒くさい。

まあそんなわけで、実は前回の取材の後には超級職になつていたんだけど書きそびれてしまつてね。本当に申し訳ない。伝達ミスなんて【記者】としてはとんでもない恥だ。けどどうかな？自分が今超級職の手記を読んでもと思うと、ちよつと優越感に浸れない？読んで貰うのが私の仕事なんだけどね。

さて、それじゃあ今日の話はつと——ん？参考までに超級職の条件を教えてくださいって？普通は有料なんだけど……。いいよ、どうせ私が就いてしまつたし。

① 超級職5人以上に取材する。

② 誤報、捏造を一度もしない。

正直ここまでは当たり前だし、余裕だった。問題はこの後の条件だよ。

③ 計100万人に記事を読まれる。

④ 1000回以上記事を制作する。

なかなか厳しい条件だろう？ 己惚れるわけじゃないけど、④とかネタに困らない

私みたいな人間以外は無理だ。③にしても一体どうやってカウントしてるんだか不思議で仕方がない。

議で仕方ない。

けど、まあ大体こんな感じだったよ。要するに「ズルをしないで面白い記事を大量に書け」って事だね。インプットする量が多すぎて、アウトプットがしにくかった私には嬉しい超級職だよ。

目玉記事が無くなったのにどうやって条件をクリアするほどの記事を書いたのかって？ 簡単だよ。

ここは「ヘルマイネ賭博都市」。そして目の前には何でも知ってる情報通がいる。そうなればカジノの勝ち方を尋ねるのが実に『人間らしい』必然じゃないか。

なんのために【遊神】からイカサマを教えてもらったと思つてた？

私がするため？

特集記事を書くため？

違う違う、大外れ。答えは『いかにも重要そうに見せかけて新参者に売りつけるため』。

どれだけこの国がぼったくりやすいかは前に言ったよね。そのお手本みたいな例だよ。あ、カジノ側にも「これこれこういう手口を使いますよ」ってあらかじめ話を通しておいたから損はしてないよ？ 後は一度きりの夢を魅せてしまえばこっちのものさ。かつての栄光が忘れられずに、ひたすら金をつぎ込み続ける。いいねえ、実に欲望に純粹で。

おかげさまで私は笑いが止まらなかつたよ。客とカジノに情報が売れる売れる。

これが今回のタネ。そして、この記事によって私は超級職に就けた。イカサマ様々だね。

人によっては私を悪人と見るかも知れない。だけど私はお客のニーズに応えただけで、責められる由縁はないね。むしろイカサマをしたお客さんの方を責めたらどうかな？

まあ矢面に誰を立たせるかは置いておいて、超級職になった直後の話でもしうか。



部屋の奥に備え付けられた椅子に座していつも通り待つ。メッセージを送ったのが三十分前だから、もう少しで来る頃かな。暇潰しに積み重ねられたノートをパラパラと弄んでいると、やがて上品なノックが来客を告げた。

「やあレプロブス。急に呼んで申し訳ない」

「今日は何の用でしょうか。お茶なら昨日付き合っただけですが？」

「そう勘繰ったって何もありませんよ。連絡したはずですが？ ボディーガードだと」

「恨まれる筋など」

「沢山ありますね」

聖人様とは一生関係ないが、私にはあいにくと被害者の会が結成されるくらいは人の恨みもある。商売柄不可抗力だけど、一部の読者は理解してくれないんだよね。

「せっかく超級職なんて人の嫉妬羨望を痛いくらい刺激するモノが手に入ったので、この際だからその怨恨はぱーっと全部解消してもらおうつもりです」

「いくらなんでも自殺の手助けはお断りですよ？」

「まさか」

君は相変わらざるようだが、神父様の目の前で自殺宣言するほど私も豪気じゃあない。そもそも、おとなしく死んでやるならボディガードに呼ばないね。勘違いしないでほしいけど、怨恨を『解消』するんだ。『晴らさせる』つもりなんてさらさらないさ。なんで彼らの自業自得の代価に私の命なんだ、厭に決まってる。

「既に種は蒔きました。どんな風に芽吹くか楽しみで堪らないですね」

「種とは先週の号外のことですか」

「はい」

先週、「報道王」を手に入れて次の日。早速スキルの使い勝手でも確かめようと近隣の町、それとちようどドラグノマドが近かったからそちらも含めて大規模な情報公開をした。生放送だよ生放送。いやあ、こちらから向こうの様子は分からないけど、注目されてると思うとゾクゾクしたね。内容？ マスター・ティアン問わずに未確認犯罪の暴露さ。詐欺等の軽犯罪からティアン殺しの重罪まで。半数は指名手配されたんじゃないかな。

余談だけど、その翌日には【犯罪王】から大量の自白リクエストが来てたには笑うしかない。『この私の悪事を白日の下に全て曝してください』って……。

「その指名手配食らった数人が結託してこの街に来ているようで。おそらく今日あたり

お礼参りに来るだろうから守って貰おうか、と」

「何故今日なのか聞いても？」

「さあ？ 何分向こうの都合です。私のログインするパターンを調べていた以上、同時にあつちのパターンも必然分かるのに向こうは気づかなかつたらしい」

深淵を覗く時、深淵もまた覗いているのだから。自分で言うのもアレだけど、この街で私から隠れるなんて結構難儀。念には念を入れて同僚から「虫」も借りてたから、【絶影】でもなければ完全隠密行動なんて無理だろう。

その時、不意に机上の紙面でペンが踊り出し、黒々としたインクを滲ませること無く徐々に白紙を埋めていく。

『残り五分』

「来た！」

稀にふざける同僚を警戒して、一応自前の確認手段として手元のページのページをめくる。あの黒幕気取りは油断ならないからな……うんうん、本当に来てる。通信機で急いで連絡を入れるが、間に合うかな。ふふふ、これでも客商売だからね。サービスは大切にしないと。

「気にはなっていたが、何故ワタシなのかね？ ワタシよりもっと強者に頼めただろう」

「防衛戦力としてはレプロブスで十分なんですが……ぶっちゃけると権力面の強さも加味して。事無きで済むならそれに越したことはないのです」

「なるほど」

ドタバタと階下を荒らす訪問者のために扉を開け放って待つのは優しさなんかじゃない。資料紛失したらどうしてくれるんだ、二度とログインできないようにしてやる。

「いたぞ、お前がハマチか!」

「はい。私がハマチですが、本日は如何な御用件でしょうか。情報の売買? それとも情報規制……は手遅れでしたね」

「ふざけんな! よくも公開処刑してくれたな!」

「私は事前に通達しましたが? 現に四割のお客様は規制のお知らせにに応じてくれました」

無許可でやらないだけで有情だろうに。どうせ自由の謳い文句を自分勝手に許されると解釈したキツズだ。自分だけが特別で他人よりも優遇される、そんなベツタバタに甘い考えに違いない……ああ、私は受け入れるよ。それもまた『人間』だ。だから私は平等に接しよう。公平無私、情報屋としては理想的だろう?

「このぼったくりめ……」

「であるならば、あなた方の置かれた苦境はその程度の価値ということですね」

レプロブスみたいな聖人もいれば、こんな屑もいる。本当に見てて飽きないねえ……。

「こんのツ……《クリムゾン・スファイア》！」

ついに、というほど長くもない導火線が切れたのか抗議集団の先頭から肌を焦がす火球が撃ち出される。普通こういう所つて火気厳禁なんだけど、常識がないのだろうか。顔は覚えた、余罪追及決定ね。

迫り来るのは非戦闘員の私など即死であろう殺意と熱量の塊。まあ当たらないから大丈夫。

「《スピン、ルーレット紅黒大回転》」

傘を開くように展開されたルーレット盤が火球を押し止め、同時に球を投げたように回転を始める。

ルーレットの結果は、黒。

「おわっ！」

回転が止まると同時に火球が逆再生のように勢いよく飛び、術者を巻き込んで盛大に爆ぜた。

あのカウンタールーレット、やつぱり悪質だよ。

「邪魔だジジイ、退け！」

「こちらのレプロブスさんはこの街のカジノを取り仕切っておられる方なのですが……」

「知るかよ、俺らはテメエが死ねばそれでいいんだ！ 他の奴なんざ興味ないわ！」

社会的圧力作戦は失敗か……。仕方ない、セカンドプラン。窓の外をチラッと確認すれば配置も終わっているようだし。

「そうそう、ここが何階か知っていますか？」

「何？」

答えは3階。だからどうしたって？

「レプロブス」

「はい？」

「着地は頼みます」

人間、落ちる時には高さが予測できないと恐いだろう？

踏み締めていた白亜の堅牢な外見の巨大建造物——私のエンブリオ【古今統在 アツシユールバニパル】が、跡形も無く消失した。今は手の甲の紋章の中だね。

当然その上に立っていた我々は。

「え」

ふわりと停止した無重力感の後、地面に叩きつけられるように落下を開始する。落下

ダメージでデスペナになってくれればいいんだけど……まあダメだろう。戦闘職にとつて3階からの落下なんて掠り傷がいいところだ。別にそっちが狙いではない。

さてさて私とレプロブスを取り囲むようにルーレットが丁寧に展開されてから、満を持して叫ぶ。

「お願いします!!」

返答は、地の底から。

「……ワーム?」

間違いではない。ワームなんて安易な言葉で定義していいのか知らないけど。

五匹のワーム……しかも額に《符》を貼り付け強化されたキョンシーがアッシュールバニパルの跡地から這い出る。それぞれ強さは純竜以上、超級職すらいないエンジンジョイ勢に勝てるかな?

「人使いが荒い上司は嫌われるぞ」

「ああ張さん、今回はどうも」

【大霊道士】張葬奇、ヘルマイネに支部を持つ黄河マフィアの支部長さん。つまりは私と似たような立場の人間だね。そしてレプロブスと同じくボディガードの依頼先で

もある。

表側の力だけで帰ってくればよかったのに……自衛の為には致し方ない。何故人が反抗するか、いや反抗できるか分かるかい？　それが反抗できる相手だからさ。そのまま当たり前のことだが、親しい友人に文句は言えてもヤクザには言えないだろう？　彼らにとつて私は「逆襲しても問題ない相手」だったんだ。事実腕力じゃ勝ち目はゼロだしね。もつとも、それは無力とイコールではない。

「……いつクソ強え……」

「何重のデバフ込みだよあれ……」

現に蹂躪されてるのは彼らの方。うわ、あのプレス状態異常のオンパレードだ……。権力者とはいえマスターであるレプロブスだけなら敵に回してもいいと思っただろうが、残念。私を敵に回した時点でこの街全てが牙を剥く。口で言っても聞かなそうだから、突きつけてやった証拠がこの惨劇さ。高々マスターだと侮るなよ。次はグランバロアの海賊団でも呼んであげようか？

「助かりましたよ本当に。危うく殺されるかと。よく私の依頼を受けてくれましたね」「マスターなのだから死など軽いものだろうに。街の有力者たる「遊神」と我ら〈蜚氣楼〉の野望を知るお前。名も知らない有象無象とどちらを採るか尋ねられれば答えは明白だ」

「約束の報酬は何かいいでしょう？ 街での便宜、敵の情報、UBMの生息地に話せる事なら何でも教えますが……」

「何も話さなくていい。俺たちの計画の隠蔽度を上げろ。誰にも教えるな」

「了解しました」

ビジネスライクな付き合いは大いに結構。彼らからすれば私なんて余計な不穏因子なのは間違いないのに、それでも対等に接してくれるのには感謝しなければ。

情報の重要度的にはざっと50億かなあ。これは相手がある程度把握してる場合。「特ダネ教えて」なら150億は固い。イベントの規模からすればこれでも安いよ。

そうこうしてる内にデモ隊は全員デスペナになったのかワームが大人しくなっていた。話しながらキョンシー操作できる張さんは流石だよ。エンブリオ込みで成り上がるマスターとは質が違う。

「これでいいか？」

「ええ、もちろんです」

これだけ盛大にやれば彼らももう来ないだろう。私は「情報を大量に持っただけのマスター」から「黄河マフィアが背後にいる危険なマスター」にランクアップしたわけだ。ま、*「監獄」*に送られた彼らには関係ないけどね。

次はこの情報を慎重に拡散させないと……マフィアとつるんでるって言いふらされ

たら多少イメージが悪くなる。表向きはそうなる前に正論を擦り込んで、陰謀説扱いにしないといけない。同僚含めた裏側は……いいや。あつちもこつちも大差ない。最近
は■が歯止め掛けてるらしいが、それでもあの貴婦人よりマシだ。

「それでは、今後とも良きお付き合いを」

皮肉でも何でも無く、この時は心からそう願っていたんだ。

□ ■ ヘルマイネ (after??)

「あーあーあー、こんな無残な姿になって……。レプロブスなら治せますか?」

「体力はまだしも、部位欠損は無理です」

「ならどうしましょう? とりあえず支部で応急処置だけして、だけどその後は面倒見られないな」

「やけに珍しく献身的ですね」

「私だつてこうなりかねないのを、故意にとはいえ救われてる。遠因は私とも言えるし……。礼には礼を、無礼には無礼を。レプロブスは助けるのに反対ですか?」

「いえいえ、むしろ罪人こそが救いの対象。助力こそすれ、咎める道理がどこにありますか」

「助力と言つてもそつちに匿つてもらうのは危ない……ああそうだ、近くに【盗賊王】が

来てたはずだ。彼女に引き取ってもらおう」

「確かにカレラの下ならば安全ですね」

「決まりだ。さて、連絡コードは何処行ったかな……」

file. 3 これより神の視点にてお送りします

□■〈DIN〉グランバロア支部

「頼むよ、リア友がこの前UBM討伐したとかで自慢してくるんだよ……一匹で良いから教えてくれない？」

「駄目な物は駄目です。金銭もそうですが、その手の情報を買うならともかく売るには局長からの許可が必要です。あ、カルメリアさん」

「失礼します。SAR様はいらっしゃいますか？」

舌打ちを捨てて立ち去った巨漢と入れ替わりに、女性が訪れたそこは海上の船内とは思えないほど広々とした空間、そしてチカチカと不規則な明滅を繰り返す機械と数人の職員が詰められていた。しかし大したリアクションもなく、彼女は淡々と受付に足を運ぶ。

「ようこそ！ 久しぶりだねえ。次の進路の相談でしょ？ もうちよーつと待つてね、今ちやちやつと視ちやうから」

「いえ、お構いなく」

「悪いねえ、人間の欲望なんて汚いモノ見せちやつたし……先輩にそういうのも好む^た蓼

虫もいるけど、気が知れないよ。最近はあるものも増えてきて苦労してるんだ。彼らじゃ行つた所でどうせ倒せないからしばらく誰にも教えてないけど。デスペナ回避させてあげてる僕って優しくない？ ああ、ごめん。次向かうのは〈西海〉だっけ？」

今回〈DIN〉を訪れたカルメリアは海賊のようなラフな服装ながら、グランバロア政府のれっきとした役人である。そんな彼女がわざわざ部下に頼まずにここを訪れるのは、それだけ機密性の高い用件だからだ。

グランバロア号及び船団の針路決定。それが彼女の主な業務。

いくらグランバロア号が戦艦として破格の強さを誇る兵器でもあるとしても、国民を下手に危険な目に合わせるわけにはいかない。ただでさえ海のモンスターは陸上のモンスターよりも強い傾向にあるのだ、他にも嵐や「海竜王 ドラグストリーム」を筆頭とした怪物など航海に障害は多い。

そんな重要役人であるカルメリアに臆することなくケラケラと笑う少年は、玉座とも言うべき豪華な椅子に堂々と座し、目の前のモニターに目を走らせていた。

「ざつと俯瞰した感じ海上にいるのは【震海猿 フルナーラ】【妖溶海鼠 ピリスネラ】【天網鬼 イジンガン】……あと知つてると思うけど【海竜王】もちよつと近い。というか最近の行動パターンが不明瞭だ。何か教えられてない？」

「……特には」

「あつそ」

航海を続けるグランバロアにとって針路の選択とは国にとっての大動脈にも値する。それを外部の〈D I N〉に委託するのはどうかとは思いますが……最高精度を誇るのだから仕方ない。なにせ単純な搜索範囲で考慮するならば、ここに派遣されているのは〈D I N〉でも屈指のマスターなのだから。

【超オウアー・サウエイア測量士】S A R。そのエンブリオ【界見玉座 フリズスキャルヴ】T Y P E : ギア・カリキュレーター。この地よりはるか上空を漂う複数の小型監視衛星である。

北欧神話において主神が腰掛け、九つの世界全てを見渡すといわれた玉座の名を継ぐエンブリオ。その性能はまさしく伝承の如し。

しかし現実には世界は一つだけだ。ならばどうしたか。「フリズスキャルヴ」は——
 【《平行移界》。第二から第五へ】
パラレルシフト

強引に世界を九つに分割する。

玉座の前に映し出されていた映像が、通常のものから切り替わる。それはあたかも魚群探査機のように。

「水中にいるのは【宝蝕珊瑚 エイバンデート】【戒光閃魚 ワットメック】。あと【エツジ・マンタ】の群れが北上してる。もう産卵シーズンだっけ？」

そう、「フリズスキャルヴ」は『世界』に対応した視点を持つ。

通常観測『ミズガルズ』

魔力観測『アルブヘイム』

スキル観測『ヴァナヘイム』

水中観測『ニブルヘイム』

地中観測『ニヴェダリール』

熱量観測『ムスプルヘイム』

モンスター観測『ヨトウンヘイム』

そして情報の受信機たる玉座にして統括機『アースガルズ』。九番目が未だ不在なのは〈超級〉に至っていないからだろう。

それを差し引いても馬鹿げた性能。だからこそいくつかの欠陥がある。たとえば一度に一つの視界しか確保できなかったり。視界による情報しか得られなかったり。マスターが搭乗していなければ使用できなかったり。

まあ現状でも困ることはないのです、のんびりと九つ目の世界を待っている。

「はいこれ安全航路の提案ね。それにしてもやっぱりモンスターの個体数がいつもより多い……本当に何も知らない？」

「ええ」

「苦手なら嘘は吐かない方がいいよ。基本的に僕らは全員《真偽判定》持ちだから」

「……実は最近《モンスターバイト》が買い占められていたらしく、誰かがモンスターを誘導している可能性がある」と

《モンスターバイト》はその名の通り、モンスターたちのエサ。それも純粋なエサ^{フード}ではなく、彼らを引き寄せる香料が混入されている。主に「斥候」達が不意にエンカウントしたときの離脱用や、「罨師」の対モンスタートラップに組み込むアイテムだが、買い占められることなど滅多にない。というか今までにない事態だ。

「なるほどなるほど。国家ならぬグランバロア号転覆でも企んでるのかねえ……これだけのモンスターが大挙して襲撃してきたらこちらも無傷とはいかないだろうし。場合によっては大怪我だ。しっかしその犯人は凄いや。自力でこれだけのモンスター、しかもUBMまで見つけてくるなんて」

「あなた方に頼ればすぐなのでは？」

「まあね。だからこそ凄いつて言ってるんだ」

「どういう……?」

「だって僕、その手の人にはUBMの情報なんて売ってないもの。唯一の例外を除いてね。〈DIN〉ですらない一般人が? これだけの情報を? その上アイテム買い占める資金力? 是非ともスカウトしたいね!」

「相手は犯罪者ですよ?」

胡乱げな視線に刺されても我関せずと何々大笑。少年の姿で^{アバター}ありながら、どこか奇妙な嗤い。

「関係ないさ！　ファイルの馬鹿や先輩方に比べればかわいいもの。ところでカルメリアさん」

「はい」

「今まで渡した海図、どうした？」

「上司に渡しましたが」

「その前だよ」

SARはUBMの情報を売り渡した、唯一の例外。グランバロアという国、もつと細かく言えばその役人たるカルメリア。彼女にだけは毎月高額報酬と共に、律儀に精密な情報を渡していた。

「まさかその情報元手にモンスター掻き集めたりなんてしてないよねえ？」

「……、」

「うーん、学んじやったかー。どれだけあからさまでも沈黙は金、推定は無罪だ」

もしも推定で終われば、だが。

カルメリアの額を一滴の汗が流れ、肩には一匹の羽虫が止まるが彼女に気にした様子は無く、気にする余裕もない。

「じゃあ話題を替えよう。【測量士】ってどんなジョブだか知ってる？」

「……土地を調査する為のジョブとだけは」

【測量士】とはマスターにしてみれば、ぶっちゃけ産廃も良いところのジョブである。何せ目玉の《マッピング》の利点の大半は管理AIによって潰されてしまったのだから。もちろんそれ以外にもスキルはあるが、【探掘師】や【採集師】の下位互換に甘んじざるを得ない。現地へ行って現物と触れることによって多くの情報を得る後者と、視界に収めるだけで少ない情報を得る【測量士】。ティアンであるならば過程にさほどの差はなく、結果のみが異なる。

だが、もしも尋常ならざる視界を有する者が居たのなら？

「部分的に正解。『土地』じゃない、『座標』だよ。実はずっと前から続けてたんだよね、《マッピング》」

モニターが切り替わる。表示されたのは周辺の地図、否、その推移。特別な奥義でも何でも無い、最高レベルの汎用スキル。それはとある賭博都市に存在するマスターのエンブリオにも近い。それでも座標の特定は【測量士】ならではだろう。

「さて、この時間この座標から海に《モンスターベイト》が流れ出しているんだけど、カルメリアさんはどこにいた？」

「私は少なくともそこにはいませんね。そもそも私には動機がない」

冷汗は渴き、羽虫もどこかに消えていた。

「共犯かあ……ま、役人がモンスターの前に出るなんて危険な事しないか。動機？ 僕は【探偵】でもないし、そんなことはどうでもいいよ。興味半分で首突っ込んでるだけ。問い質すのは僕の仕事じゃないしね」

「なら国に直接『彼女はテロを計画したか』などと尋ねるのですか？」

「始めはそのつもり。どうせそっちは貴女に握り潰されるだろうから、次の手もあるけど」

「ほう」

「ブン屋として一面トップに飾る」

「……………ハッ」

警戒をして損した。彼女は、そんな安堵と嘲笑を同時に感じさせる器用な表情を浮かべる。

「過去にあれだけのフェイクニュースをばらまいたあなたの胡散臭い与太話を、誰かが信じてくれるといいですね」

「ああ、まだ覚えてたの。アレは酷かったねえ……」

「他人事ですか？」

「一つサービスで教えてあげるよ」

「フリズスキャルヴ」の高い座面から飛び降り、勝ち誇るカルメリアの前でにつきりと年相応の風体でこう宣った。

「あれは嘘なんかじゃなかった。嘘にされたんだよ」

「何を」

「世の中怖いものでね。同じ立場にいるはずの僕でも名前すら知らない奴がいる。あつたはずの過去を改竄する奴がいる。なんならこの世界の法則を書き換えるような奴だっているんだ」

真に迫り、そして憂いと諦めを悟った声音はとても外見通りには受け取れない。中身は死ぬ間際まで老成した狸爺と言われた方がまだ納得できる。

「事の顛末も知らないで、無知を晒すのは恥ずかしいよ？ それに、ちよつと腹も立つ。せつかくだからその化け物の一端でもご覧する？」

「オイオイ同僚を化け物扱いたあ酷いぜ」

「減点方式にするより、先輩を立てた僕を評価してもらいたいね」

いつの間にかカルメリアの背後に現れた、船乗りのような逞しい白人。豪快に白い歯を見せてSARと談笑しているが、こいつの中身も決して見た目と一致していないのだろう。

「オルフィさんのステータス、見えた？」

「オルフィってのも偽名だな」

見えない。役人として完璧なはずの《看破》が徹らない。ステータスは愚か、名前すら分からない。まるで未知の生命体。内なる焦燥を秘めた彼女に、オルフィはその巨軀をずずいと詰め寄せる。

「嬢ちゃん、結構あくどい事してんなあ。下手に賢い分タチが悪イ。生産クランへヒドラ・タンクに依頼するまで〈魔法の土鍋〉、〈カラリア薬局〉、〈エズタニア商会〉……一体何回足跡消しながら調達してんだよ」

彼の口からスラスラと出てくるのは間違ひなく彼女が利用した組織の数々。一流のハッカーが数多のサーバーを経由して追跡を躲すように、彼女も多くの道筋を経た上で計画を実行した。それなのに、何故目の前のこいつには筒抜けなのか？

「それでも、彼より私の方が信頼されているのに代わりはないッ！」

「つーかそうなるように俺らが仕向けたわけだしな」

「ホントあの時は僕も悪かったけどさあ……」

「ハハッ、反省までできりや上等上等。ああ、嬢ちゃん。SARが出すから信用されないんだろ？ なら簡単だ。俺が広めてやるよ」

「……はあ。」

「それでも俺はコイツと同じ〈DINN〉の局長だ。俺が不服ってなら【報道王】に掛け合っ

てやってもいいが、どうする？ 盛大なアナウンスは期待できるぞ？」

ニヤニヤと下賤に問うオルフィは、絶対に粗野な船乗りではないと断言できるほどに緻密にいやらしくカルメリアの逃げ道を塞いでいく。〈D I N〉の局長だと告げられた時、ようやく腑に落ちた。現実とズレていた妄想のギャップが埋まる。

「本当に化け物か……」

「オイオイ嬢ちゃんまで俺を化け物扱いするのか。こんなナリでも心は傷つくんだぜ？」

それに、俺は高い《ベイト》なんざいらん。薄っぺらい紙切れ一枚で満足さ」

胸に突きつけられたのは一枚の【契約書】。

「カルメリアさんがまだ計画を続けるってなら、僕は止めるよ。こんな居心地良い場所を捨てたくないし、『フリズスキャルヴ』って精密機械だから潮風にあてるとすーぐ【劣化】しちゃうし……。だけどここで計画を中止するなら、僕は何も言わない。別に渡された仕事をしただけにしておく」

「ならこの【契約書】は？」

「それはオルフィさんのだね」

「おうよ。手間賃くらいは貰いたくてな」

【契約書】の内容は、予想に反して彼女を罰するものや貶めるものではなかった。

「海賊奴隷の引き渡し……？」

「ウチの同僚にヤベエ奴が一人居てよう。詳細は聞かないでくれ」

「ラファイル、今は大丈夫なの？」

「リアルの場合で数日はインしないらしい」

「それはよかった」

カルメリアだけが恐々としているのが馬鹿らしく思える和やかな空気だが、今逃げしまえば最期なのだろう。彼らに彼女を看取るだけの力があると、実証されてしまっている。故に苦汁を飲んで出す返答は一つだけ。

「……全て、了承しました」

「賢明な選択に感謝だね」

「それじゃあ用意が出来たらSARに伝えてくれや。俺はまだ仕事があるんでな」

悪事を働くとそれ以上の悪魔が現れるなど、一体誰が予想しただろうか。彼女の頭の中には空漠とした敗北感と共に、そのくだらない疑問だけがずっと残っていた。

file. 4 暗躍行路

□■〈絢爛都市〉レイズイニ

街自体がコルタナのバザールのような商業都市でありながら、コルタナよりも高級志向を強めたカルディナの都市。年商が軽く億を超える商店が立ち並び、曇り無きウインドウの向こう側がブランドで埋め尽くされる街。それこそが〈絢爛都市〉レイズイニである。

「本日はどうも」

「ようこそ。さき、ベルセット殿。座って座って」

そしてその街で燦然と輝く街路に立ち並ぶ立派な大店、〈ゲーリユマン商会〉。その商會内に面会の為だけに設えられた、ぱつと見は他の部屋と変わらないながらもあつらえた調度品のランクは大いに変わる特別な部屋に、小奇麗な身なりだが何処か頼りない初老のティアンが招かれていた。

「それで、此度の用件は？」

「それより後ろの彼は……」

「ああ、彼なら気にしないで結構」

「……そうですか」

よく沈むソファで彼を迎えるのは、同じくテイアンの男性。商会の主であるゲーリユマンだ。街に所属する「織ウイブ・プリンセス姫」作の衣服で全身を装飾し、豊かな口髭の下に警戒心を抜く気の良い笑みを湛えている。それでも背後に護衛と思わしきマスターを配備するあたり、ただのお人好しでもないのだろう。

そのマスターの近くを小蠅でも飛んでいるのか、鬱陶しげに顔を顰め小さく手で何かを払っているが商談に影響はないと判断し、話を元の路線に引き戻す。

「恥ずかしながら、最近では老いを痛感することが多くなってしまいました……そこへ来て先日倅の急逝です。幸い跡取りはいるのですが、何分半人前。販路の拡大や倅に商売を指導する上で協力してもらいたいです。もちろん対価は払いましょう」

「ふむふむ……まとめるとこんな所か」

老人の名はベルセット・チエスター。この街で代々受け継がれてきたマジックアイテムの老舗のご隠居だ。風の噂では当代が〈流行病〉を拗らせて亡くなり、その下の若い弟がチエスターに手助けされながら店を切り盛りしているらしいが、次男など所詮長男のスペアとしてしか育てられていない。老い先短いチエスターとしては不安が残るのだろう。

ゲーリユマンがつらつらと【契約書】に口述されたことを堅苦しく書き連ねる。期間・

報酬・禁止事項エトセトラ。全てが度の過ぎた強欲でもなければ迷い無く血判を押すであらうクリーンな内容。

そしてボンボンのような例外を除き、基本的に商人を続けられる者というのは利に聡い。欲張れば身を滅ぼすボーダーの見極めにも慣れている初老ティアンは、受け取った【契約書】の上から下まで念入りに三往復したのち、末尾の契約者欄に「ベルセット・チェスター」の名を刻む。

あらかじめアポイントメント時に聞いていたが、ベルセットの名は中堅の商会として世に知られていたが故にゲーリユマンの頬も緩むというものだろう。

「これでよろしいでしょうか？」

「もちろん。それでは」

ベルセットから返還された契約書を領きながら確認した、今日一番の笑顔を輝かせながらこう言った。

「貴様の全てを頂こう」

手中の契約書を軽く叩くと同時、炙り出しのように契約内容が書き変わる——否、変えられていた内容が消え失せる。

【契約書】は、この世界で誰でも使える確実な強制方法だ。なんなら人の一生も国の行く末すらも左右する。それ故に、サインの後に契約内容をすげ替えるなんて暴挙はあり得ない。やるやらない以前にできない。

しかし、ここどある抜け道が存在する。【契約書】は騙せずとも、契約者はどうにでもなつてしまうのだ。人質をとつての脅迫もよし、【魅了】もよし、幻影もよし。中には【詐欺師】の《契約偽装》なんてジョブスキルまである。今行われたのは、内容の記された【契約書】の上に幻影で偽の内容を上書き。それにサインさせてしまえば、始めに記された内容に同意したことになるといふもの。

加えてゲーリユマンの偽装は通常のものよりも質が高い。なにせ書き換えに特化したエンブリオを持つマスターを雇い、《看破》ですら無力化する詐欺の完成形とでも呼ぶべき代物と化しているのだ。

もちろん、こんな詐欺はこの国を除いて何度もできない。証拠は無くとも、詐欺の記録は積み重なる。

だがここはカルディナ、金が全てを支配する国。金のある悪人と金のない善人では前者の方が優遇される。良心？ 清貧？ 六文銭なら何万回でもくれてやろう。

嗚呼、きつと哀れなご隠居は突然のことに惚けてしまったに違いない。勝ち誇った顔で見下した目線の先にいたのは――。

「あらあら、これでまーた敏腕記者Bの名声が高まってしまいわ」

誰だお前は。

そこに「ベルセット・チエスター」の枯れた姿はなく、代わりにちよこんと可愛らしい幼女がベルセットと同じ服で同じ椅子に同じ姿勢で腰掛けていた。

その手には「人の口から這い出る虫」の紋章。

「貴様ツ、マスターか!!」

「あら、よく分かったわね」

「姿を変えられる理不尽な人間など、貴様らしいないだろうが！ 何よりもその手の紋章だ！」

「……あなた、本当に商人？ ベルセットのお爺ちゃんはもつと落ち着いていたわよ？

それに、姿は《変装》のジョブスキルでティアンにもできるわ。紋章も同じく」

取り乱すゲリリユマンと対称的に、幼女は呆れたとばかりに首を振る。だが無論彼とて《変装》は知識としてある。

斥候系統詐欺師派生混合下級職〔密偵^{スパイ}〕の代表的なスキル。多少後ろ暗い所のある職業の者なら、聞いたことがあつて当然のジョブスキルである。しかしこれは同レベル以上の《看破》で見破れるものであり、歴戦の商人として鍛え上げた《看破》が通用しな

かったのが第一の動揺。

正確に言えば、『看破』に効果はあった。ただ、五分前に「ベルセット・チェスター」のステータスを、今は「エイル・コルソーン」という何処の誰だか知らない少女のステータスのベールを剥がしただけで。

まあもしも〈DIN〉に問い合わせることが出来たのなら、不安を払拭するために原因の名前だけでも教えてくれただろう。

オール・フィクション
『一切架空』、と。

「それより焦ってどうしたのかしら？ 何か問題でも……あったわねえ。今までティアンだけを狙っていたから口封じできたんですもの。マスターなんて不死身の、独自のネットワークを持つてる不可思議生命体に秘密なんて握られたら困るわよね」

しかし自分も似たような偽装に経験があったために、第一の動揺はすぐに落ち着く。未だ「知られてしまった」という第二の動揺は収まらないが、僅かに軽くなった脳の回路が現状の最適解を導く。

「……一介のマスターより俺の方が権力は断然上だ。適当な罪でもでつち上げて〃監獄〃に送ってやる。誰も貴様の事など」

「信じるわ。みんなそういうのよね、『私の方が信用されている』って。ご愁傷様、国のトップですらアタシたちに頭を下げるのよ？ あ、そうそう。ダメ押しだけけど、こ

この出来事はゼーンぶ録画されてるから」

自信満々の彼女がピンと人差し指で示すのは、上。それは天井裏に潜む仲間か、外を飛ぶ従魔か、それとも更にそのずっと上か。もともと一番重要なのは《真偽判定》が反応しなかった、つまりは録画されているのが真実ということのみなのだが。

「で、そんなアタシからのお願いなんでしょー」

「大旦那。マスターは不死身だが、ずっとここにいられるわけじゃない」

小首をかしげたあざといお願いを、護衛らしきマスターが遮る。彼の提案はリスキル、つまりはログインするたびに殺してしまえば問題ないという強引なもの。現に皇国の〈超級〉はそれで己をキルしたプレイヤーを引退させてしまった実績がある。

……リアルで掲示板にでも書き込まれれば他のマスターに伝わって一発アウトなのだが、緊急事態にそこまで頭が回らなかつたらしい。

「リスキルねえ……やれるモンならやってみろよこの野郎」

しかし相手の不出来など関係なく、脇からしゃしゃり出てきた闖入者に対して不愉快の吹きだしを背負った幼女が、瞬きの隙に口調の荒い屈強な船乗りへ変貌を遂げる。それだけならまだよかつた。

連動して再びステータス欄まで変わっているのだから手に負えない。次の《看破》で見えた名前は「グロン・テスニシアス」。どうせこれもまた偽りなのだろう。

「『オレ』なら今すぐ殺せるだろうな。だが次の『儂』や『吾輩』をどうやって殺す？ 誰を殺す？ テメエらに区別がつくか？ カジノでも詐欺つてミスつて出禁になった奴が吼えるじゃねえか」

「なっ、ばっ、それを何で!？」

「だが甘え。ダチにはもつとエグい奴がわんさかいるぜ……で、だ。社長さんよ。どうする?」

言うなれば深夜のテレビショッピング。商品の持つ価値を最大限アピールするには実演が最速最適だろう。ひた隠しにしていた過去を丸裸にされて慌てふためく護衛、もとい共犯のおかげで少しは落ち着いたが、それでも現実から叫んで走り去りたい衝動がうずうずとわだかまる。

「いい加減『私』の要求に応じてくれないか?」

威圧感のある白人の姿が萎縮させていると気遣い、見かねたのか次は背の高い中年に切り替わる。されどその風貌は異様。

「あー、すまない。『彼』がどんな顔だったか忘れてしまつてね。不便はないから構わないでくれ」

どこからそのダンディーな低音を発しているのか、彼には顔が無かった。のつぺらぼうというよりそこだけ黒く霞がかつていよう、恐怖と焦燥と危機感のカクテルが商

会の主の明晰な頭脳を狂わせる。

「貴様は誰だ、要望はなんだ早く言えッ！」

「焦るんじやあない。端的に伝えれば私からのお願いは『これから私のお願いをたまに聞いてもらうこと』、だな」

「はっ、傀儡になれとでも？」

「言い方は悪いがその通り。これから私が時々頼みに来るのを快く承諾してほしい。不可能な無茶は言わんし、報酬も出そう」

「信用できるか！」

あまりにも使い捨ての傀儡にしては好待遇すぎる。

「君の前に『信用しない』の選択肢は提示したつもりはないのだが……。あるのは『信用する』か『破滅』か、どちらがお好みかね？」

煮え滾り、疑う事を止めない理性に反駁して、曲がりなりにも培ってきた商売の勘が「それがコイツなりの人使いだ」と幾ばくの逡巡の後にやっと知らせた。

事実彼(?)は他人が自分の意志で、しかし彼のために動くようにするのが好きな人種だ。綺麗な言葉で形容するなら、監督気質。自分の台本を断るかどうかはお前次第、だが演じる以上は思うままに。【契約書】なんてつまらない。おまけに最後は派手に散ってくれるのを舞台裏から眺められれば、大喜びで拍手までしてしまう愉快な外道で

もある。

「……1つ聞いていいか？」

「何かね」

もはや活路は刺々しい茨の繁茂する道のみ。それでも確定した破滅よりはマシだと腹を括る。

「いつも姿を変えられては、こちらとしても判別ができない。どうやって判断すればいい？ 本名を教えてくださいませんか？」

「最近のティアンたちは物分かりがよくて非常に助かる。しかし悪いが本名は無理だ。私の生命線なのでな。そうだな……代案として洒落た合言葉でも決めようか。私トラストミーを信じて、なんていかがかな？」

おそらくはデンドロ全土を見渡しても信用度ランキングの最底辺に位置するであろう【黒幕マスターマインド】は、心底楽しげにそう嘯いた。

file. 5 天使の里

レジエンダリアには『天使の里』という比較的新しい都市伝説がある。

里の住人は皆が見た目麗しい天使であり、息を呑む絶景を拝む事が出来る山中の秘境であるという。

ただの秘境であるならば、これはそこまでの話で終わる。だがこれはあくまで都市伝説。その理由は、〈DINN〉支部局長たちの反応のせいだ。

もしもマスターがその里について知りたがるのならば、嚴重な契約の末に伝授される。

だがティアンが里の位置を求めても、支部局長たちは誰一人として首を立てに振らない。賭博都市に居座る人間マニアも、船上より全てを見渡す少年も、永劫的刹那主義とまで呼ばれる狂人でさえ首を横に振るのだ。

それは否定しらないではなく拒絶おしえない。

ある時マスターがティアンを伴って尋ねた時もあつたが、その時も拒否されてしまった。何故教えないのか、その理由を尋ねても誰も口を割らない。

故に都市伝説。存在するかどうかすらあやふやな土地。何故局長たちが教えないの

か、その理由は――

□ 【疾風槍士】フューロ・ハルクロア

「……」は

「お目覚めですか？」

目を開けると、目の前に知らない美女が。そして遠くに知らない天井が。なんだかズキズキと頭が痛い……確か近くの森にモンスターの群れが出来たとかで、クエストを受けてくれたマスターの人と出かけたんだっけ。それで……。

「わっ」

「思い出した、へアクシデントサークル！ ここは何処の国だ!？」

「落ち着いて。ここはレジエンダリア国内ですから」

思わずベッドから飛び起きてしまったが、よかった。天地にでも飛ばされていたらどうしようかと。それにしても、レジエンダリアでもここはどこだろうか？ 首都から離れてなければいいが。

「この名は？」

「エンジェリック。外部の人からはそう呼ばれますね」

「聞いたことないな……」

「『天使の里』、といえれば伝わるでしょうか」

都市伝説で聞いたことがある。俺みたいなテイアンには、絶対に辿り着けない秘境だと。マスターの人から聞いた推論だと、「^{ヘヴン・ソルジャー}天兵」のようなレアなジョブクリスタルを保有しているのではないか」なんてあつたが、目の前の女性は美人ではあるが普通の人間に見える。

「あつ、自己紹介がまだでしたね。私はエイル・ラズウェイ。まだ幼い妹が奥にいます。それでも良ければうちでしばらく休んでいってください」

「丁寧にも……」

難しい顔で考えこんでしまったのがいけなかつたらしい。妹がいるのか。姉が美人なら妹も可愛いのかもかもしれない、なんて俗っぽい事で頭を占めっていると、ドアの隙間から覗く小さな横顔がチラリと見えた。

「君が妹かい？」

「ええ。アタシはコルソーン。あなたは？」

「フューロ。これでも【疾風槍士】だ」

「上級職なんてすごいわ！」

妬みの一切ない褒め言葉はやっぱり気持ちいいものだ。最近はマスターが増えて、上級職も珍しくないが、一昔前なら嫉み僻みが酷かつたらしい。

さて、と重い腰を上げる。

「いいと言ってくれてありがたいが、俺はもう行くよ。長居するのはさすがに申し訳ない」

「……違うのです」

何が？

「ここは秘境。マスターの方もごく稀にいらつしやいますが、周囲を純竜の巣が取り囲んでいるせいで全員もれなく一度は道中で死の危険に瀕したと聞きます」

「じゃあ俺はここから出られないのか?!」

「いえ、秘密の抜け道があるにはあるのですが……」

「教えられないのか」

「……………はい」

外敵の来ない安全圏を捨てたくはないよな。里の保安のためなら仕方ない。だが口にしたということは、規則の方の抜け道もあるに違いない、というか頼むからあつてくれ。

「ラフィル・ルテイル様、この里の〈DIN〉支部局長さんで実質的な里の長でもあるマスターの方なんです、彼女の許可が取れば外への道が使えます」

「そのラフィルさんは今どこへ？」

「それが、りあるの都合でしばらく居なくて……。今日明日には帰ってくる予定なんです」

「なるほど……。じゃあそれまでお世話になろうかな」

一日くらいなら、まだ良心も痛まないし、自制心も保つだろう。こんな美人さんとずっと一つ屋根の下、というのはちよつと危ない。最近是他の国、主にカルディナからの行商人や旅するマスターからの評判だが、「レジェンダリアは変態の国」なんて呼ばれているらしい。確かに「妖精女王」様は魅力的だが、特殊なマスターたちと同じように変態と括られるのは心外だ。名誉回復の為にも微力でも意識を変えなくては。

「外には出てもいいのか？」

「ええ。ですが森の深い場所までは行きませんよう。最近では何やらモンスターの動きも活発ですので、お気を付けて」

「わかった」

「あ、アタシもいいかしら？」

「あなたは」

「俺が注意払っておくから、ダメか？」

サービスな。さつき褒めてくれたお礼だ。安い男と思われるかもしれないが、高慢な野郎と思われて敬遠されるよりよっぽどいい。

姉の方も渋々ながら許可してくれたところで、とつとと出発しよう。散策を含めても日没までには戻りたい。

「よう、コルソーンの嬢ちゃんはデートかい？」

「羨ましいでしょう？ 彼がアタシを森までエスコートしてくれるのよ」

「おいおい……」

里を歩いていると、割と人とすれ違う。噂では見目麗しい天使ばかりって脚色されていたが、普通の村だな。下世話な中年がいて、ませた少女がいる。想像していた『天使の里』よりも俗っぽい。

「さっ、行きましょー！」

「分かっているって」

にやける男性に手を振り、森へと入る。まだ浅いからな、出てくるのは精々【パシラビット】といった初心者向けモンスターの類くらいだ。自慢の槍を振り回せば、容易く切り抜けられる。正直なところ、モンスターを相手するよりも子供の前で変な恰好はできないというプレッシャーの方が、負担として大きい。

「強いのね」

「これでも上級職だしな」

まだまだ余裕はある。亜竜クラスが出てき始めると危ないが、引き際は弁えてるつも

りだ。少女一人の重荷なら、最悪純竜が相手でも抱えて逃げ切れるだろう。

よほどの事がなければ大丈夫。そんな甘えや不確かな推定を、マスターたちは「フラグ」と呼ぶのだったか。そしてそれは、得てして回収されるものだったのを、完全に失念していたのを悔やむことになる。

「[[[[g i g i g i g i]]]」

「なんだこいつら？ 虫……いや機械か」

一体いつ境界線を超えたのか、カマキリや蝶を模した機械の群れが襲い掛かってくる。幸い強さ自体はそこまでのものでもなく、軸にクリティカルすれば一発だ。しかしドライフのダンジョンでも無いのに、野良の機械敵とは面妖な……。

「どうする、戻るか？」

「それは難しそうね」

背後の固い声に振り向けば、既に結構な数に回り込まれていた。クソつたれめ、装甲が迷彩だから見えにくい！ だが姉のラズウェイから責任を持って妹を連れ出した以上、大怪我なぞさせるわけにはいかない。

「マジか……強行突破になりそうだ」

「手伝いはいる？」

もちろん有効なアシストならありがたいが、お気持ち程度の言葉ならやめてくれ。変

な期待を抱いちゃう。ただでさえ後ろに回り込んでいる連中はさっきまでのカマキリ共なんかとは異なる、カブトムシみたいな重量級ばつかだ。中途半端な意識だと死ぬ可能性も――

「里の人以外には見せちゃいけないのだけど……。非常時だし、許してくれるわよね」
バサリ。

羽毛が何枚も重なった翼を羽ばたかしたら、きつとこんな音がするんだろうなという想像通りの音。そして、想像を超える光景。

ああ、そういえばあそこは『天使の里』だったな。今さらすぎる確認だが、ようやくその意味を知る。そのまんまだ。

「《クリエイト・セイクリッドウエポン》」

住人が、【天使】なのだ。

庇っていた少女は背中から巨大な翼を生やし、頭上には光輪を戴いて。子供が絵本の中で思い描く天使が、光の剣を手にしてそこにいた。マスターの与太話かと思つてたが、本当に【天兵】があるのかもしれない。

「さ、帰りましょう。姉様に怒られないうちに」

「お、おう」

笑顔の形は数分前と変わらない。神々しさが付与されたくらいだな。だが、俺の背に

隠れていた時とは頼り甲斐が段違う。振るった光剣は俺が複数回貫いて倒していた機虫を一刀両断、四方の逃げ道を潰されても上へと飛んで包囲を突き破る。参ったな、これじゃあ形無しじゃないか。あの子一人で帰れそうだぞ？

「それにしても多いな……名前も分からないし、こいつら一体なんなんだ？」

「その辺りはラファイル様に調べてもらいましょう」

そういや里長は〈D I N〉のマスターでもあるってラズウェイも言っていた。確かにあいつらの情報量なら、何かあるかもしれない。レジエンダリアの政争でも何やらこそそ調べ回ってるみたいだし。まあ俺みたいな木っ端には生涯無関係な世界だ。

こういうのをマスターは「覚醒イベント」って呼ぶんだったか、コルソーンの真の実力が明らかになり、俺たち二人の間にも余裕が生まれる。

そのまたの名を、油断。

「——うえ？」

死闘からほど遠い、間抜けた声が聞こえた。それは俺の喉からか、はたまた腹部を蜂の毒針に貫かれた天使コルソーンの細い喉からか。

「うそで」

何故予測できなかった！ カマキリからカブトムシへの戦力の偏り。もうあつちは

露骨に対策を立ててきてたつてのに！ であるならばは隠密行動に特化して、確実に一発は致命傷を刻む敵が出てきたつておかしくはなかった。

蜂の一刺しをきつかけに、機械虫が俺ではなくコロソーンへと殺到する。何度光剣が振るわれ、何体もの味方が倒れても、機械はその骸がくたを乗り越えて前進を続行。

カマキリが殺意に塗れた鎌を振り下ろす。カブトムシが味方を挽き潰しながら突進する。蜂が更に群れながら殲滅網の密度を高めていく。

もう俺の側から、天使の姿は拝めない。

「《ストーム・ステインガー》アアア!!」

邪魔だ邪魔だ邪魔だ！ 強引に楔を打ち込むように、鉄壁の包囲網を突き抜ける。超音速の槍先に機虫が入れ食いに串刺されていくが止まらない。

「……………ああ」

やっとコロソーンの下まで辿り着いたのは、ちょうど彼女の体が光の塵に還つていった時だった。ふと、無惨な姿を見なくてよかつたなんて馬鹿な事を思った。いや馬鹿なのは俺か。注意しとくつて姉に大見得切つて、その結果がこれ。どんな顔して信賴してくれたラズウェイに会えばいいんだ。

「そもそも俺も帰れねえか」

ははっ。我ながら酷いな、どれだけの重荷をあ姉に背負わせるんだ。妹を見殺しに

した恨みの相手も既に死んだ？ 俺ならこの世界に絶望するね。

天使を殺めた機械虫は、勝手に死地へと飛び込んできた俺も逃がしてはくれないだろう。せめて遺体だけでも回収して持ち帰ってやりたいが無理……

「……………」

待て何が引つかかった？ 何か、とんでもない前提条件から間違っていたような背筋が凍る感覚。しかし答えを出そうと思考の海に沈む俺を見逃してくれるほど、機械は融通が利かなければ甘くもない。俺は直面した死に諦め、鎌は頸を刎ねようと閃いて。

《ホーリー・スフィア》

「コルソーンは死にましたか……」

逆にカマキリの方が上空からの爆撃に爆ぜた。そして爆発の中でしゃらんしゃらんと鈴の音が軽やかに通る。白煙を掻き分けて降臨したのは妹と同じ翼を羽ばたかせる姉と、その腕に丁重に抱えられる若い貴婦人。

「誰だ？」

「私は〈DIN〉エンジェリック支部局長、ラフィル・ルテイル。あなたは見ない顔ね？」
「ラフィル様、彼が〈アクシデント・サークル〉に巻き込まれた【疾風槍士】です」

「あら」

この人がラフィル様か……。コルソーンたちの慕う長。ラズウェイもそうだが彼女

にも、里の人たちには申し訳なきすぎて直視できない。

「それよりも先にこちらを片付けなくてはね？ ラズウェイ。あなたが部隊を率いてこの虫を掃討しなさい」

「了解」

天から次々と天使が降りてくる。なんで俺だけ助かつちまうかなあ……。あの場で死なせてくれた方がずっと楽だった。これもコルソーンを死なせた罰か。……そういえば、彼女の遺体は？

「私はやることはありませんので」

機械虫に食われた、なんてはずがない。風に飛ばされるほど粉碎されたわけでもない。彼女は、光の塵になった。

超常のマスターと違って、ティアンが死ねば遺体は残る。「大死霊」のように人間を辞めていてもこれは同じだ。つてことはつまり、彼女は……

「上級職持ちとはこれまた上玉だこと」

彼女がそうなのだとすれば、まさか里の人全員同じなのか？ だとすればあそこには

『一人』もいない……？ いや、違う。

「ラフィルさん、あなただけが里で唯一の人げ」

「《マインド・ブレイク》」

file. 6 墮天の儀

■ レジエンダリア国内へ天使の里へ

「~~~~♪」

鬱蒼と生い茂る緑豊かな森の中を、似合わぬ貴婦人が鼻唄混じりに闊歩する。剣戟と爆碎音をBGMに、その手には銀の錫杖と軽装の槍使いを引き摺った彼女——
 【心理術士】マインド・マンサー ラファイル・ルテイルの脳内は喜びに溢れていた。

上級職持ちのティアンなんていつ以来だったか。きつと彼が天使になれば、目覚ましい貢献をしてくれるに違いない。配下が一人死んでしまったが、彼と交換なら収支はプラスだ。しかもあの機械虫どもを取りまとめているのはおそらく〈UBM〉。きつと配下の天使が特典武具を贈ってくれるに違いない——。

限りなく公算の大きい皮算用を重ねながら、彼女は里に向かって歩く。胸を躍らせたその歩みには、ティアンを「洗脳」するという立派な犯罪行為を働いている自覚があるように見えないが、それもそのはず。彼女は生粋の遊戯派、印象としては手持ちの戦力を強化している程度なのだろう。今までは〈DIN〉からの命令で一般人に被害を出すことなく、「奴隷商」としてグレーゾーンの人材確保を図っていたが、別に彼女はティア

ンを害することに抵抗があったわけではない。ゲームなのだから経験値を貯めるにしろ素材を集めるにしろ、何かしらの犠牲は必須事項。何十年も前のレトロゲーム時代からずっと分かっていたことだ。デンドロのリアリテイ故に現実と同一視する人間もいるが、彼女のような人間もいるというだけ。

「……そのティアンは何だ？」

そんな浮かれた彼女を、あと数分で里に辿り着くという所で面識の無い男が待っていた。見覚えのない顔、されどその手の甲に入れられた「口から這い出る虫」の刺青はよく知っている。

「あらオルフィ、久しぶりね」

「そのティアンは俺が渡したヤツじゃねえな？」

「彼はアクシデントよ。偶然なのだから許されるでしょう？」

「入手経路は聞いてねえ。とにかくさっさと解放しろ」

【黒幕】。時にグランバロアの高官から海賊奴隸を引き渡させ、時に大商会を手玉にとるトリックスターにして新参の頃から既に危険と目されてたラファイルをこの土地に押し込めた張本人。

ラファイルとは【契約書】こそ使っていないが定期的に合法的な奴隸を渡すことで新たな天使を創造させ、その天使を各都市に派遣することで情報網と潜在戦力を拡大するとい

うwin-winな関係を築いていた、いわばビジネスパートナーだ。

しかしティアンに被害を出すとなれば、この関係にもヒビが入ってくる。「黒幕」も人心を弄んでいる時点で熱烈な世界派ではないが、ティアンを蔑ろにして〈DIN〉全体の信頼性が低下してしまうのはいただけない。これは「黒敵」に限った話ではなく、他の局長にも当てはまる。故にラフィルについても制限付きの妥協案を採用したのだから。

「はあ……オルフィの頼みなら仕方ないわ」

お上の命令には逆らえないとこれ見よがしに大きなため息を一つ吐き、ずりずりと槍使いを渡そうと男に近づいて。

「はいこれよろしく——《マインド・ブレイク》」

「おまつ……!!」

男がぐったりとした「疾風槍士」を抱えた瞬間、額を強打されたように体が弓形にのけ反り、そして膝に土を付ける。もちろん下手人は目の前の貴婦人^{ラフィル}。

彼と彼女の間は、とつくにひび割れていた。

「《変装》が解けないならそれが素の姿かしら？ 誰も姿を知らないからって、とんだ驕りじゃない。ああ、予備の【契約書】を用意しておいて幸いだったわ」

【黒幕】も熟知していたが、【契約書】にはいくつかの欠陥がある。サインした人間の

異常事態など紙切れは慮ってくれないのだ。幻影を見せられようが【洗脳】されていようが関係ない、サインさえええされれば【契約書】はそこまでという腐りきった役所仕事。「こんな所に閉じ込められてたらゲームなんてしていても愉しくないし、意味も無い。音に聞く『監獄』と何が変わらないのかしら？ いえ、むしろあちらの方が幾分か快適そうなくらい。拾ってもらった事に感謝はしているけれどそれはそれ、これはこれ。狭い場所に連れられてティアン^エを貰^サって卵^{てんし}を生んで。これじゃあ飼^{てんし}い殺^{てんし}しの家畜と同じじゃない。そろそろ外に出たいわ」

溜まった鬱憤をグチグチと表面上は黙りきった人型に吐き出しながら、出来上がった【契約書】を突きつける。その内容は前通りの定期的な人材派遣に過干渉の不許可、以降の隠蔽の続行などなど。よほどのマゾヒストや狂人でもなければ破り捨てる理不尽。だがマスター保護によって意識はあるものの、【洗脳】され体^{アバター}を突き動かされた男は危ない手つきながら自分の名前をしつかりと記入してしまふ。

それを慈悲深い聖母にも捻くれた悪女にも見える曖昧な笑みを浮かべながら、ラフィルは書かせた【契約書】を確かめる。

「ふうん、これが【黒幕】の本来……存外変わり映えしないのね」

やつと自由が手に入った。何もかもが上手く行きすぎて怖いくらい。きつとラフィルは自分の実力を過信したがために勝利を確信してしまったのだろう。

残念ながら洗脳される程度の人間に【黒幕】マスターマインドは務まらない。

「俺の本名ねえ……興味あるから教えてくれよ」

びゆわりと不穏な風が吹く。背後からついさつきまで会話していたのと同じ声がする。振り向きたくない。誰がそこにいるのか見たくない。ぞわりと肌が総毛だつ。

「なあ、ラフィール」

「……………嘘」

「嘘なんて吐いちゃいけないさ。吐いたのはそこで茫然自失してる【高位絵師】ハイ・ペインターの方。まあ、そうさせたのは他ならぬ俺だがな」

まるでドツペルゲンガーのように、【洗脳】した男と瓜二つの姿。声も姿もステータスも全てが同一。これが真の【黒幕】。

「どうせ《看破》しても《一切架空》に弾かれるからって手の紋章だけで判断したんだろう？ カルディナの某商会から借りたんだが、こいつ便利だよな。正攻法じゃ見抜けない偽装なんて、すぐに十は悪用法が思いつく」

黒幕が替え玉を立てるなど、戦国時代からある古典的な常識だ。だが手の紋章を書き換えただけで本人と偽るのは、誰にでも化けられる【黒幕】にだけ利用できる心理的な抜け道。

「話が逸れたか。さて、ラフィール被告。先輩への【洗脳】未遂について言い分を聞こうか」

「戯れと言つたら？」

「《真偽判定》って知ってるか？」

「そうなるわよねえ……分かつたわ、認めましょう。あれは全部心からの本音。私は罰せられるのかしら？」

「いや、性直は好みだ。それに、そろそろ不満も溜まる頃だろうとは思っていたさ。じゃなけりや用心して影武者なんざ立てねえよ。だから交換条件だ。そのティアンを解放すりゃ、お前の外出も限定的に許可してやる」

「上級職のティアンはレア物だし、へあくシデントサークルから落ちてくるなんて初めて。初物くらい許してくれないかしら？」

「ダメだ」

ラファイルが開き直つた時でさえ色に出さなかつた【黒幕】が、ピリピリと若干苛立つた空気を纏つた固い口調で否の判を押す。

「へあくシデントサークル」で来るのは確かに初だが、俺が渡してないティアンもちよくちよく【天使】にしてるだろ。配下に運ばせるのを感じしてないでも？」

《真偽判定》をすり抜ける巧妙な話術も、断定的な一言の前に碎け散る。問題なのは「へあくシデントサークル」で飛ばされた【疾風槍士】を洗脳すること、ではない。もつと問題は広義であり【黒幕】が関与していない、つまりは一般ティアンを非合法に洗脳

し天使にしている事だ。

「何をおかしな事を……」

「冷静に考えろ。罪を重ねるのは賢い判断か？ 九人、いや今回を含めて十人。それが

これまでの非公式の被害者人数」

【黒幕】が手を差し伸べた次の瞬間。戸惑うラフィルの体内から、無数の羽虫が【黒幕】の手のひらへ帰還する。あるものは鼻先から、あるものは肩から、あるものは脇腹から。衣服も肉も関係ないと、愚直に主の元へ一直線に飛翔する。

「これは?!」

「隠し事は全部筒抜け、残念だったな。あ、そうそう。ここの会話も全部筒抜けだから」
懐から取り出したものは一見ボールペン。だが現実にも存在するそれは、上級職の【^{エージェント}諜報員】に就職した際に【技師】たちと試行錯誤して再現した高性能盗聴器^{ロマン}である。

ところで、その秘密道具を経由して聞き耳を立てているのは一体どこの誰だろうか？
「ラフィル被告にはこんな自然たつぷりの法廷で悪いが、裁判官はとっておきだから勘弁してくれ」

最初に言っていたはずだ。ラフィルは被告人だと。ならば野外の裁判所において厳罰を求める検察は【黒幕】、弁護人は本人が兼任、ならば木槌^{ガベル}を振るう裁判官は？ そいつがロマンの繋がる先でもある。

『どうも。こちらカルティナはヘルマイネ支部局長を務めさせていただきます。』
【報道王】ハマチです』

旧いブラウン管テレビに電気を通したような懐かしい音と共に、木々をスクリーンに巨大な映像が映し出される。レジエンダリアからヘルマイネまでは相当な距離があるはずだが、ハマチの就く【報道王】の奥義《全世界放送》ユニバーサル・レポートにとつて距離の長短などさしたる障害にはならないのだろう。

『本日【黒幕】より提案された、〈DIN〉エンジニアック支部局長ラフィル・ルティルの罷免決議の結果をお知らせにきました』

「……は？」

画面の向こうの優男が告げたのはあり得ない事実。

『先ほど追加で証拠提出された音声データを全支部にも《放送》した上で慎重な議論を行いまして、最終的に賛成多数で罷免が支持されました。この結果を受けて社長への報告が決まりましたが、世界派の局長なんて怒髪衝天してましたね』

「支部局長たちの決定だけでは、他の局長の罷免なんてできなくてよ？」

「それでも本気つてのは社長にも伝わるだろうよ。あの双子社長は、俺なんざよりよっぽど冷酷で機械的だぞ？ お前一人を庇って他の局長を離反させるか、その逆か。どっちに賭ける？」

盗聴器ポールベンを胸ポケットに戻しつつ、アイテムボックスから取り出して装備したのは光沢のあるリボルバー。

「やりすぎたんだよ。ここからはアウト、もうフォローできない。だがまだ今なら組織の自浄作用で形で処理できる。よかったな、ここより快適な『監獄』に送ってやるよ」

「私が犯罪者？ そんなの絶対に受け入れられないわ。私は自由に、好きに生きるの」「出所してからのセカンドプランは檻の中で考えてくれ」

パアンと乾いた発砲音が新緑に吸い込まれていく。遂に【黒幕】が引き金を引いた火薬式の鉛玉に対してラファイルは。

「護りなさい、《タナハ原典之壺》！」

天空からのスポットライトに照らされながら召喚されたのは、桁違いに神々しい天使。【神装人理 タナハ】の必殺スキルによって呼び出されたそれは、タナハ聖書の名の通り存在が広がれば広がるほどに強力になっていく。配下天使のステータス合計値の10%と全スキルを共有した怪物は、てんし豆粒以下の鉄屑など意にも介さない。

「……銃口を向けられて吹っ切れたわ。もはや〈D I N〉の地位に固執しない。ここから先輩の【黒幕】を殺そうと自由よね？」

「まあな」

『《ホーリー・スフィア》』

天使の周りを衛星のようにいくつも光球が周回する。硬くも速くもない【黒幕】では耐えられず避けられない砲弾が斉射され、その全身はあまりに刺激的な白光の渦中に没した。非戦闘員一人を葬るには過剰な火力、それでもラフィルと天使が気を許すことはない。何故なら、着弾の直前に【黒幕】の口は動いていた。

「《人の不幸を蜜として》……？」

「滅多に日の目を見ない必殺スキルさ」

身の毛もよだつ低音を響かせて、小刻みに空気を叩きながら光を突っ切ってきたのは数百の羽虫——【黒幕】のエンブリオ、TYPE：アドバンス・レギオン【伝天虫 サルタヒコ】。

【イデア】と同様に人型範疇生物を「乗騎」とみなして体内に三戸（サルタヒコ）の虫を潜り込ませ、過去の罪状（ログ）を見るエンブリオ。またモチーフとなった猿田彦は三戸の虫の主の他に、道祖神としての側面もある。

ゆえに何者もその歩みを妨げるに能わず。

《道祖神の加護》。【サルタヒコ】の飛行を邪魔するものを無効化するスキル。姿が視認でき、【サルタヒコ】自体にしか効果がない廉価版《消の術》とでも言えようか。しかしこれは生存トリックの片割れに過ぎない。

「耳障りな羽音ね……これを全て殺せば【黒幕】は死ぬかしら?」

「それはさすがに死ぬ。約束してやる」

もう一つのピースとなる《人の不幸を蜜として》の効果は「マスターの全体積を【サルタヒコ】に置換し、スキルコストを半減する」というもの。スキルにリソースを割いたせいで貧弱な、それこそ叩けば潰れる羽虫程度のステータスしか持たない【サルタヒコ】になっても却って弱体化ではないか?

まさか。一時的に全身に《加護》が適用されるようになる、それはつまるところ絶対の防御。実際に直撃を食らっても生存できたのだから、その安全性は検証済みだ。

『戦況が芳しくないようですが、ムシヤパスでも急行させましょうか?』

「サラツと最高戦力投入するなよ……つかあいつ忙しいとか言ってた割にログインしてなのか。まあ余計な世話だ。コスバ悪いし」

「随分と余裕だけれど、それはいつまで続くのかしら? 無効化のスキルなんて延々と使えるものでもないでしょうに」

いくらコストが軽くなっているとはいえ、数百匹が同時にスキルを使用すれば負担は馬鹿にならない。現にじわりじわりと総数は減少の一途だ。

無論《原典之壺》にも時限はあるが、■のリソースが底を突く方がずっと早い。

「密偵風情が戦場の表舞台に立った時点で負けなのよ。その内に配下の天使たちも合流

するでしょうし、そうなれば勝ち目どころか逃げ道も無くなるわ。いい加減に諦めたら？」

「あ？ ……おいおいまさかこの期に及んで、まだ俺が舞台上に上がってるなんて思ってるのか？ 俺だつて弁えてるさ。キャストなんて無理無理、裏方に徹するだけだ」

「じゃあ今の修羅場はなんて言い訳するのかしら？」

「強いて言うなら……お膳立てかな？」

ラフィルの想定の中では三つの時間的な区切りがあつた。1つ目は《タ原典之壺ハ》の制限時間。2つ目は配下たちの合流までの時間。そして3つ目が「黒幕」の限界だ。1つ目が最初に来ない限りラフィルに負けはなく、そして来る可能性は極めて小さい。だからこそ余裕を保っていたのだが、実はもう一つのタイムリミットが存在していた。

「餞別に教えてやるよ」

人とは、因果を無視して手を出されてもへらへら笑えるほど阿呆な生き物ではない。自己防衛を始めとして、より酷く傷つけられるほど相応の報復を企てる。

例えば、出会い頭にいきなり命の危機に晒されそうになったら？ さらにその敵が死んでも生き返るような人間なら、殺人の忌避感も大いに希釈されることだろう。

「そろそろ洗脳が解けるぞ」

「(？)ふうっ?!」

折り重なる柔布と腹部を、超音速の穂先が背から貫く。「黒幕」に意識を奪われていた彼女と天使には想定外の乾坤一擲。今さら持ち手を確かめるまでもない。

自分の精神を破壊しかけた女が、次は他の人間を襲っている。きつと湧き上がったのは唾棄すべき私怨などではなく、称えるべき正義だったのだろう。だからこそ泡沫の夢から醒めたその一槍に迷いなどない。

「ティアンをただのNPCだと侮つたな？ それが失敗だ。生きている、というか生きている俺らと同じように行動する。お前の資源でも財産でもねえんだよ。勝手に考えて勝手に動く。だーから面白いんだろうが、にわかヴィランめ」

人の影で嗤い、身内からは永劫的刹那主義者とまで呼ばれる狂人が、草を踏む足音も立てずにひっそりと這い寄る。

「黒幕ウウウウウウウ!!」

ラフィルの慟哭、けれど彼女は同時に嘲つてもいた。自分を狙う銃口の更に奥には、至高の天使がその大剣を振りかぶっていたのだから。「疾風槍士」がラフィルを縫い止めようと、召喚された天使までが止まるわけではない。そして神話級に届かんとする天使の一刀は、銃弾よりも遙かに速い。大逆転勝利なんて欲張らない。これで引き分け^ド、だが舐める苦汁と辛酸は甘くなる。

「あー、「黒幕」って散々呼ぶのは構わないが、それだけだと勘違いされるのは心外だな」

超音速の刃が脳天から股間までを真つ二つに切り裂いた——ように見えた。

「こちとら人々を惑わす超一流の【幻術士】イリュージョニストでもあるんだぜ？」

暖簾に腕押し、糠に釘。湖面の月は掴めない。足音が聞こえない？ 当たり前だ、歩いているのは質量を持たないまやかしなので。では、本題。霞の中へ消えた本体は何処へ？

「嘘Чтo лoжбoから始жeнaまったнaчaлoсbことは、

嘘тo лoжбoで終иわらдoлжнoなければбo лoならкoнчнтbсяない。

それが自然の摂理である……テメエはクビだよ、ラファイル」

次は、耳元でカチリと弾倉の回る音が聞こえた。

閑話 聖人と天翼

□ バチカン 聖ペトロ大聖堂

「ミケーレ司教枢機卿。本日はご足労頂き、ありがとうございました」

「なに、我々は会議が仕事だからね。それに、教皇から呼ばれてしまえば断る道理もないだろう？ 悲しいかな、君も私もあの人の部下という事は変わらないのだよ」

「はあ」

コミカルに嘆いてみせる老人だが、相対する若い司教はまったく表情筋を緩めない。この場に居られる時点でこの司教もかなりの地位だが、老人はその上を行く。何しろ司教枢機卿といえば上から数えた方が早い、というか教皇に次ぐナンバー2である。そんな相手に軽々しく話をできる人間などそうそういない。少なくとも現実リアルには。

「君もそこまで肩肘を張る必要は無いと思うが。『天は人の上に人を造らず人の下に人を造らず』とは東洋の文豪の言葉らしいが、我々の教えに通ずる物もあるとは思わいかね？ 個人的には聖書の傍らに置きたいほどの格言だ」

「……何故突然東洋の格言などを話すのですか？」

「今日の議題がニホンの信徒からの苦情だったから、つい思い出してしまった。聞くか

ね?」

「いえ、遠慮します」

「そうか」

職業意欲が旺盛なのかそうでないのかよく分からないなど、心中で溜め息を吐く老人。彼が教皇に呼ばれたのは日本の信徒からの上申があつたからだ。いわく『新興宗教からの勧誘が迷惑だ』と。その新興宗教の本部に文句を言おうと思つても、どうやら常に不在らしい。だがミケーレには心当たりがあつた。
 〈Infinite Dendrogram〉の中にいるのではないかと。そして、それを教皇に進言してしまつた。

そうなつてしまえば他に手がかりのある人間も居らず、なし崩し的にミケーレが交渉役を任されたのだ。本人に伝手があるわけでも無いのに。

(まあ人脈の広い「彼」なら何かしら伝手もあるだろう。それにしても、仕事に苦を思へた事はないが、ゲームをやらされた事は無いな)

「さて、私は依頼を何とかせねばな」

「成功をお祈りしています」

若い司教と分かされると、老人は職業を換えた。

□ カルディナ・ヘルマイネ 【遊神^{ザ・フレイ}】 R・レプロブス

いつも通りのセーブ地点からログインする。そろそろ同じ景色にも見飽きた事だし、たまには足を伸ばして別の場所に行ってみても良いかもしれない。

「まずはハマチに会いますか」

とりあえずいつも隣人が白亜の門を構える場所に赴くと、空き地になつていた。カレがログインしていないとは中々珍しいと思いつつフレンドリストを見ると、どうやらログインはしているらしい。

「すいません、そのアナタ」

「アタシ？」

一人で悩んでも仕方ないと、通りがかった通行人の女性に声を掛ける。

「ええ。ここにあった建物の主が、何処に行つたかは知りませんか？」

「それはアタシも知りたいよ。ファトウムからオススメされて来たのにさー」

「ファトウム？」

「おや、ハマチからそんな名前を聞いた覚えが。」

「あれ、知ってる？じゃあアタシの事は？」

「……すいません。浅学なもので」

悪いが、紅白のツートンカラーのパイロットスーツを着た女性なんてハマチから聞いた事がない。そしてこの街の顔役の一人に名を連ねるワタシも見たことがなかった。つて事はこの街の人間じゃない？

「なら教えてあげよう！アタシは【撃墜王^{エース}】のAR・I・CA。よろしく！」

その名には聞き覚えがあつた。ハマチに聞かされた「超級」の中にそんな名前があつた気がする。

「ああ、確か……『蒼穹歌姫』？」

「なんだよもー。知ってるじゃん。で、おたくは？」

明らかに自分よりも高齢者に、よくここまで気安く話せるとは思うが、自己紹介されたのだ。ワタシもしなければ不敬だろう。

「ワタシはR・レプロブス。この街で寄り合いの纏め役を押しつけられる、しがない神父ですよ」

【遊神】になつてからしばらくは何も無かつたが、人の口に戸は立てられないようで、結局は寄り合いの顔役を任されてしまった。いわく、「そんな超級職に就いたのだから、顔役でない方がおかしい」と。はあ……、ハマチが日頃愚痴を漏らす苦勞に、ワタシも最近ようやく慣れてきたほどだ。

「へえー…………。じゃあさ、この街のコト、詳しくあったりする？」

なぜだろう。カノジョからは厄介事のオーラしか漂ってこない。そんな長年賭博で頼りにしてきた勤だが、今は裏切らなければならぬ。カノジョを、救わなければならぬから。

「まあ、人並みには」

「ちよūdいいいね！　なら、アタシにイロんなコト教えてくれない？　場所を変えてさ」
…………身の危険を感じるのは何故か。

□ 私営カジノヘイコール・イコル

「先生、来てたんですか！」

「ライモンド君、ワタシの事は後でいいからこちらのカノジョにお茶を」

「はい」

ワタシが持っている店に帰ると、たまたまいたのか【高位賭博師】のライモンド君が駆け寄ってくる。

「〈神の血と同義〉ねえ。服装を見るにカトリックじゃないの？」

「同じように救いもたらされるなら、神の名の違い程度は些細な物だと思いますよ。
リアル現実ならともかく、ゲームでは」

もし現実の教義を考慮するなら、ワタシは賭け事に手を染めている時点でアウトだろう。

ライモンド君が持ってきたティーカップを渡して、同じテーブルにつく。

「それで教えて欲しい事とは？」

「うーん、機密事項なんだけど」

「それを聞かない事には教えようがありません」

乗りかかった船だ。泥舟だろうがタイタニックだろうが最後まで付き合わなければ気が済まない。

「ま、いつか。聞いた後は自己責任でお願いね」

「もちろん」

余所のことは知らないが、この街に限って言えばワタシを害せるヒトは居ないだろう。害しようとするヒトは居たが。

「アタシが探してる物は、お隣の黄河の宝物殿の奥から持ち出された、いや盗み出されたお宝」

何やら不穏だが、この国にとつては盗品騒動は日常茶飯事だ。あまり気にしない。国宝級は中々無いが。

「かつての【龍帝】が数多くの宝物獣^{UBM}を封じ込めた、その珠の一つよ」

“火薬庫”の話は黄河系のカジノ場から良く聞くが、中身がこの街にあるとは。

「質問しても?」

「うん」

「それは、持っていることが知られた場合弱みと成り得ますか?」

「細かいことはよく分かんないけどなるんじゃない? 一応は盗品な訳だし」

「なるほど」

ならハマチから送られてきた情報の中にあるかもしれない。「人の上に立つならば、部下の致命的な弱点を把握しておくのは反逆を抑制するのに適した手段です」とか言いながら毎月渡してくる各賭博場の弱みをファイリングした中に。

あれはどの棚にいられたか。

「ああ、あった。この中に探し物ってあります?」

見せてはいけないのかもしれないが、カレのことだ。ワタシの性格まで見通した上で渡しているはず。

「んー……何これ?! 【アムニールの葉】とかマジギアの純正パーツとか置いてある。あとでとってこようかな」

「ご自由にどうぞ。それで、お探しの品は?」

「見つかった。黄河マフィアの〈蜃気楼〉って所らしいね。まだここには無いらしいけど

さ。ちなみにお店って何処？」

「表に出て左にずっとです。装いが黄河風なのですぐに解りますね」

「ありがとー。手間が——」
「おおつ、見ろよこれ！宝石の掴み取りUFOキャッチャーだつてよ！」
「バツカ、ニセモノに決まつてるだろ——このゲームセンター賑わつてるね」

店内でテンションの上がつた2人組へマスターが騒ぐが、誰も注目しない。マナーに厳しい厳肅な賭博場なら摘まみ出されても不思議ではないが、ここはそういう場ではない。それからその宝石の大部分はイミテートだが、稀に本物も混じっています。

「知りたいことですよ。それにしても【龍帝】の封印珠ですか……」

「何か知ってるの？」

「前にハマチから聞かされた話がありましたね。聞きますか？」

「じゃ、聞かせてもらおうかな」

ワタシの所の司教とは違つて好奇心旺盛で結構。あれは、何時の話だったか——

◇◇◇◇◇

「レプロブス、黄河の【龍帝】について貴方はどれくらい知っていますか？」

右手でチェスのナイトを、左手で将棋の金将をつまみ上げながら尋ねてきた。何故そんなことをしていたのかは疑問だったが。カレなりのルールがあったのだろう。

「一体急になんですか」

「いえ、先ほど黄河の奴から連絡が入りまして。近々ここヘルマイネで『小火騒ぎ』が起こるから注意しろと。そのための予習です。それで、答えは？」

「言われてみればほとんど知りませんね。黄河マフィアの方々からこぼれ聞く話程度です」

「……これからは出来るだけ距離をとってください。間違いなく崩壊しますので」
「分かりました」

断言していたが、この分野に関してはカレを信頼していいだろう。全知まではいかずとも、大抵は知っていそうだ。

「今の『龍帝』が蒼龍人越、先代が紅龍人超、それからよく称えられる黄龍人外というのも居ましたか」

「それだけですか？」

「そうですね……はい」

返答を聞くと、カレは安堵の表情を浮かべた。

「はあ、よかったです。もしも知っていたら興奮めでしたから」

見くびられたようで心外だが、事実知らないから文句も出ようがない。

「何故貴方が知らないのか、教えましょう。ティアンが知らない、考えないからですよ」
「数百年前なら当然では？」

「古文書まで遺っているのには？」

そういえば、時々この街にも少ないながら先々期文明や先期文明の記録も流れてくる。

「まさか誰かが意図的に……」

「正解」

なら、誰がやったのかという疑問も出てくる。そんな大規模な魔法にしろスキルにしろ出来るのはごく少数だろう。

「行ったのはおそらく、黄龍人外。原因は自作の秘術でしょう。国民全員に洗脳を掛けるなど、彼にしかなできない。原因はおそらく、彼が編み出したという魔法の中には〈UBM〉を珠に封じ込めるといふ物があったので、それでしよう」

それはワタシも聞いたことがある。なんでも、百体近い〈UBM〉が閉じ込められているとか。その何が原因になるのだろうか？

「遠回しだとは思いませんか？ 彼が実際に天才だったのは疑いませぬ。なら尚更〈UBM〉をタイムする、屈服させるという芸当も出来たのではないでしようか。わざわざ

珠なんかには封印するよりもよっぽど考えやすいですし、〈UBM〉本来の力も十全に扱えます。ちなみに【霸王】は〈イレギュラー〉を屈服させて乗り物にしていますから、拮抗していた【龍帝】に不可能と言いつける理由もないでしょう。それに、今まで普通に〈UBM〉を倒していたのに、いきなり封印の方向に舵を切ったのも不自然ではありません。過去の【龍帝】同様の手法で国を守っていても問題なかったはず。なら何故封印珠なるものを造り出したか——過去に前例が居たとしたら？」

前例、黄龍人外の更に前の【龍帝】。居たとしても不思議はないどころか、居ない方がおかしい。……そして、テイアンの誰も憶えていないのもおかしい。

「見て貰った方が早いですね。《第七共有書庫》解放」

将棋の駒を放り投げ、指を鳴らしたその手には真新しい古文書があった。

「これはかつてのある【龍帝】が書き記した手記のコピーです。流石に原本を持ち出したら黄河から物理的に炎上させられますので。これによれば、今から4代前の【龍帝】もまた、生涯を掛けて〈UBM〉の封印に成功したとあります」

4代前というと、黄龍人外の先代か。けど、その情報が抹消される理由が思いつかないが。

「ああ、理由は割と単純です。その【龍帝】が天才ではなかったから、そして黄龍人外が後世の事を考えたからです」

もし天才だったならば、記憶は残されたままだった？ 後世の事を考えて、先代に関する記憶を消した？ 訳が分からない。

悩むワタシに微笑んで、カレは説明を続けた。

「今、誰も宝物獣の珠を造ろうとしないのは何故か。造れないかどうかは別にして、チャレンジもしない」

黄龍人外が編み出した秘術なん——あ。

『黄龍人外は天才だった故に出来たが、凡百な私たちに真似できるはずがない』。そう
思いませんでした？」

それが狙いか。

「しかし天才ですらない普通の【龍帝】にも出来てしまったら？」

他にも挑戦する者が現れる。実際に秘術なのだから大抵の者は挫折するだろうが、もしも「生半可な」才能を持つ者が偶然にも成功してしまつたら。

「珠はその特性上、特典武器とは違い譲渡が可能です。つまりは誰でも手に入れば使用できてしまう。「三強時代」と呼ばれ、豪傑の集つた当時ならさしたる問題はないでしょうが、その後はどうなりますかね」

封印できる人材の奪い合い、封印珠の奪い合い。どれにしても凄絶な争いの予感しかない。

「だから黄龍人外はティアンから先代の記憶を消した。無駄な火種を生みださない為に。それこそかの天才らしい技術です。ついでにティアンが誰も知らないおかげで、我々のようなへマスターも話を聞く事が無くなった。私とてこの古文書を見つけなければ、ゲームの仕様で済ませてしまいましたし」

手を振ると古文書がひらひらと舞う。

……つい聞き入ってしまったが、もしかしてこの話はかなりの機密事項では？

「まあ今ではへマスターなんて規格外が量産されてるので、昔よりは重要度は下がりましたよ。それでもこの程度の世間話なら大丈夫でしょうが、余り公にはしないでほしいですね」

そして忘れられた【龍帝】の名は――

◇◇◇◇◇

「――紫龍人非」
ジーロンレンセイ

「そんな奴聞いたことなかったよ？」

ワタシも無かったが、局長界限では常識らしい。

「おいこれモノホンの宝石じゃね?!」

「マジかよ！ 俺のとか《鑑定眼》すら写らねえんだが。見た目は綺麗なのに。【エレメンタル】の卵とか？」

「んな訳あるか。ちよつと貸してみ」

「どうやら先ほど店内にいた2人組へマスターのうちの片方は宝石がとれたらしい。おめでどう。」

「じゃあその【龍帝】が作った珠も宝物殿にあるんだ」

「いえ、宝物殿にあるのは物は全て黄龍人外の珠だけだそうです」

「紫龍人非さんとやらの珠は野放しってこと？ 危なくない？」

「そんなこともないようで。カレいわく紫龍人非は封印が精々で能力の利用まで至らず、碎かない限り普通の石だそうです。その点、やはり黄龍人外は天才だったようです
ね」

前例がいたとはいえ、既存の術を昇華させるとは天才と言わずしてなんなのだ。

「ふーん……………つ、伏せて!!」

ワタシの感心を余所に、気のない返事をしていた返事から一転、カノジヨは緊迫した声を上げた。

その瞳に映ったのは、風前の灯火のような微かな淡い光を点した石を砕こうとする2人のへマスター。

「はい?」

何も動けずに立ち尽くすワタシを無視して、直後に凄まじい爆発音が轟いた。

煙の燻る中から出現したのは橙色に透過する巨大な獅子、の首から上だけ。

『Gururururu……GUWOOOOOOOOOOOOOO!!!』

太古の【龍帝】により封印され、何の因果か偶然にもこの街で解き放たれた古代伝説級へUBM〈轟傑獅頭 マイエルン〉が、歓喜を吼えた。

閑話 聖人と天翼と猛獣

■□ あるへUBMについて

数千年前から今に至るまで残るモンスターの中に、「フレイムスピリット」と呼ばれる物がある。外見は大体子供サイズの火の玉だが総じて好戦的な性格をしている上、火を食らって成長する特徴をもち、「紅蓮術士」たちからは大いに恐れられていた。

しかし反面、未成熟な個体は水に非常に弱く、水鉄砲で重傷、雨が降れば瀕死という軟弱さだった。

ところがある一体の「フレイムスピリット」だけは冷静だった。

『こんなところで燃え尽きて良いのか?』と。

果たしてそいつは燃え続ける決断をした。

無闇に相手を攻撃せず、それでもなお向かってくる敵にのみ対応をした。

度々起こる戦争の影で、文字通りの戦火を食らい続けた。その努力は実を結び、雨にも打ち勝つ熱量を手に入れ、やがて紆余曲折の果てに伝説級へUBMにまで進化した。

ある時それは「龍帝」が参戦するほどの戦争に遭遇し、そして歓喜した。これでまた火が増える、と。

事実、戦争のおかげで更なる進化を遂げ、古代伝説級〈UBM〉にまで届いた。それは知り得ない事だったが、戦火がより苛烈になる後の“三強時代”まで生き抜けば神話級も夢ではなかっただろう。

しかしそれは叶わない。戦争を起こした張本人、「龍帝」紫龍人非によつて発見されたがために、封印されることになった。

その〈UBM〉が「轟傑獅頭 マイエルン」。

何故討伐ではなく、封印されたのか？

封印した方が討伐するよりも被害が少ないからである。その能力とは――

□ヘルマイネ 私営カジノ ヘイコール・イコル

「……なんで今かなあ」

「ぼやいても仕方ありません」

燻る煙から獅子に続いて姿を見せたのは、無傷の神父服の老人とスマートなボディの青い〈マジンギア〉。

「なんで爺さんの周りだけ被害ないの？」

「さあ？ 運がよかつたのでは？」

テーブルは吹き飛び、ファイルは炭になっているのに老人だけは煤がついただけで無

傷。これがスキルでもなく、ただの強運だというのだから恐ろしい。

窓ガラスも割れているのか、煙が晴れていく。

「もつと幸運なことにティアンの犠牲者はいないようですよ」

石の周りにいた2人組〈ハマスター〉が覆いとなったおかげで、被害が抑えられたらしい。意外にも高レベルだったのだろうか。光の粒子は散見するが、ティアンの無惨な手足や体は見つからない。

「ねえ、コイツをさっきの黄河マファイアのトコに放り込んできちや駄目？」

「民間人の被害を考えると許可できません。素直に町の外へ。南門が最も人が少ないはずですよ」

「融通利かないなあ。ほら、付いてこい！」

『GURROOWOOOU!』

高らかに歌う〈マジンギア〉が超音速で窓から飛び出すと、猛々しく吼える獅子も天井を突き破る。

「大丈夫ですか！」

「キミは衛兵の詰め所に行つて、避難誘導を頼みます。ワタシからの伝言ならば動くでしよう」

「はい！」

そう言つていつも首から下げているトランプの刺さつた金の十字架を、身分証代わりにライモンドに渡す。

「さて。カノジヨも〈超級〉なようですから容易くは死なないでしょうが、心配ですぬ……。ワタシ一人で何が変わるのか知りませんが、一応は向かいますよう」

青年が駆けていったのを見届け、一人眩くと大した武装も持たずにふらりと老人は店から去つて行く。

□ヘルマイネ 南門外

ヘルマイネは広大な砂漠の中のオアシスのような立地である。逆に言えば、四方を砂漠に囲まれている。故に街から一歩出れば人影は格段に減る。それでも商人などが通ることも稀にはある。しかし南門の傍には「ドラグワーム」を筆頭に、比較的強いモンスターが闊歩するためまともな人間なら近づきたくはない場所だ。だからレプロブスはこの場所を指定した。

……割と重要な情報なのだが、時折知らないルーキーが「ワーム」に貪り食われる光景も見ることが出来る。

さて、そんな舞台でAR・I・CAと「マイエルン」は闘つていたのだが。

「ああもう相性が悪すぎー！」

予想外に苦戦していた。

〈超級〉と古代伝説級〈UBM〉。自力では〈超級〉の方が上回るはずだが、未だに活路を見出せずにいた。

彼女も理解しているとおり、理由は単純な相性の悪さ。AR・I・CAに「マイエルン」の攻撃は当たっていないが、「マイエルン」にもAR・I・CAの攻撃はダメージになっていない。

「こういう厄介な奴はマニゴールドあたりが相手すればいいのに！」

それはAGIスピードを突き詰めたAR・I・CAとは対極的な戦闘スタイル。圧倒的な防衛力防御力と莫大なHP体力を保有する耐久型ビルド。

だが、それだけならAR・I・CAも時間を掛ければ倒せるだろうが、「マイエルン」の持つスキルのせいのできない。

「本当にキリが無い！」

何発目かのライフルが火を噴く。弾丸は確実に「マイエルン」を捉え——体からも火を噴いた。

『GURURROROOOOOU!』

銃口を振り向いた体に、傷は微塵も見当たらない。

これこそが「轟傑獅頭 マイエルン」の真骨頂。本体が知覚しているかどうかに関わ

らず作動する、完璧なオートカウンターステム。体に衝撃が加わると同時に、爆発を起こし中和する。あまつさえ近接なら敵にダメージまで与える優れ物。

向かってくる敵だけへの対応を極めたスキルであり、「龍帝」が封印を選んだのも納得だ。

そして何も防御だけのスキルではない。

『GURUWU』

攻撃の当たらない敵に業を煮やしたのか、その気高く波打つ鬣たてがみを振るうと、一面に緋色の粉が撒き散らされる。

「あ、これヤバイ……」

その瞳にかつてない範囲と規模の危機を視たAR・I・CAは即座に超音速で距離を取ろうとするが、無駄。

『GURUURUUUUUUUUUU!』

轟ッ!! と辺りが爆炎に包まれる。それが普通の爆発ならばAR・I・CAは逃げ切れたに違いない。

が、結果は異なる。

〈ブルーオペラ〉は背後からの爆風に吹き飛ばされ、空を舞う。対して「マイエルン」にはさしたる痛痒も無かった。

「……………ハハッ、冗談。なんで追尾機能なんて付いてんの？」

爆発の原因は「マイエルン」のスキルによる物。その名は《獅子粉塵》。僅かな体積から、火薬数十倍の爆発力を持つ粉末にするスキル。「マイエルン」の楯にして槍、正しく攻防一体。当然「マイエルン」自身も高い耐性を持っている。

だが《獅子粉塵》に追尾機能など備わっていない。今回が特殊例なのだ。

AR・I・CAが超音速で移動した為に空気は押し退けられ、AR・I・CAの《マジンギア》、《ブルーオペラ》が通った跡は瞬間的に真空となる。

問題なのは、この真空をいかにして埋めるか。

答えは周りの空気が流れ込む。

爆発の元は空気中に漂う粉塵。それが空気の流れによって《ブルーオペラ》の軌跡に沿って連鎖爆撃が発生する様は、あたかも追尾機能。

AR・I・CAが超音速で動かなければ追尾はされないだろうが、被爆地に入ってしまう。結局、いくら未来が見えていても回避のしようがない。避け続ける前提のAR・I・CAにとって「マイエルン」はとことん相性の悪い《UBM》だった。

『GArururu……GURUWU』

漸く敵にダメージを与えたことで調子に乗ったのか、再び《獅子粉塵》をばら撒く「マイエルン」。

次に起こるのはまたあの大爆発——

「《ホワイト・ランス》！」

——かと思われた。街から白霜を纏う槍が打ち出され、「マイエルン」に突き刺さる直前で蒸発し、気を取られる。

「ちよ、何やってんの！」

慌てたAR・I・CAが街を見ると、外壁の上に何人かの人影がある。

「コイツがそっちに行っちゃうでしょ！」

そう、援護はありがたいのだが、街からの攻撃はよくなかった。せつかくAR・I・C Aが気を逸らしていたのに水の泡だ。せめて砂漠に出てから撃つて欲しかった。

『GURUGAAAAAAA!』

ダメージはなくとも攻撃されたことは分かったのか、怒り狂った「マイエルン」は街目掛けて突進する。スピードこそないものの、所々体から発生する小爆発からも憤怒が窺える。

触れてはいけないモンスターをどうやって止めろと。

少なくともAR・I・CAには止められない。

だから、別の人間が止める。

「《ポーカーフェイス絵札の騎士団》——ストレート」

トランプの兵隊が、猛獣を取り押さえた。

□ 【遊神】 R・レプロブス

「何をやっているのですか！」

「ああ、レプロブスさん。外で〈UBM〉と戦闘してる奴が居たんで援護したんすよ。そしたらいきなりこつちに向かってきて……」

久々に全力で走ったせいで呼吸も苦しいが、間に合ってよかった。まったく、文字通りの横槍なんて入ったらモンスターでも怒るに決まっているのに。

「まあ後にしましょう。このモンスターを何とかしなくては」

今は《絵札の騎士団》が取り押さえているが、ストレートではよくて純竜級、長くは持たない。

「門の外に出て、遠距離で仕留めましょう。それが最善手です」

「わ、わかった」

「じゃあ俺からいこう」

返事をした男が外壁から飛び降りる――

『GOWU』

――と、地面が盛大に爆ぜた。

当然降りた男はデスペナルティ。砂に混じって緋色の粉が見える、おそらくはあれを導火線代わりに点火したのか。

「……失敗しましたねえ。へUBMも個体によつて賢さが違うのですか」

自分に攻撃した相手を覚えていたのだろう。獅子らしくない狡猾さだが、こんなことならスキルでヘイト値を下げておいた方が良かったかもしれない。「遊神」になる前に一度へUBMを見たことがあったが、ここまで悪賢くはなかった。完全に誤算だ。残る最善手は前衛をAR・I・CAに任せて、ワタシたちは後衛からサポートに徹することか。爆発的な火力の上昇が見込めない以上ワタシの必殺スキルは無意味か。むしろワタシが脱落するデメリットが大きい。ならばそれ以外で――

「おいジイさん！　なんでそんなに落ち着いてるんだよ少しは慌てろよ！」

降りた男のパーティメンバーらしき別の男から胸倉を掴まれる。どうやらパニツクに陥つたらしく、気が動転している。

「アナタこそ落ち着いてください」

「ふざけんな！こつちは相方が死んだんだ。もうキレそうなん——」
『GOWUN』

一際轟いた爆発に唸り声を添えて、突然足場だった外壁が崩落した。ワタシは体を強かに打っただけで済んだが、カレは駄目だ。瓦礫の下敷きになっている。これは本当にA・R・I・C・Aに頼るしかない。

……そう言えば、何故足場が崩落したのだろうか？余波程度なら外壁は耐えてくれるだろうし、まさか……。

『GURU』

振り向けばそこにいた。

A・R・I・C・Aは一体どうしたのでしょうか？ふと疑問を抱くと、機械的に拡声された声が聞こえる。

『悪いねー。さっきの爆発で機体がイカれちゃった。そつちでどうにかしてくれない？』

どうにかする？このワタシが？無理だ。

『あたしは外様だけどカルディナにはそこそこ詳しいよ。金に溺れる奴、欲深い奴、悪巧みかしない奴、いろいろ見てきた。爺さんはどれでもないでしょ？』
だからどうした。ワタシが無力なのは変わらない。

『ハッ、無力？ 謙遜も度を超してる。能ある鷹が爪を隠しすぎて食い込んでない？ そんなんじや痛いでしょ。もう出しちゃいなよ、人助けのためにさ』

……まだ、ワタシにも助けられるだろうか？

『どうかな、あたしの【カサンドラ^目】も少し先しか見えないから知らないけど、爺さんが本気出せば大丈夫じゃない？ ほら、もたもたしてるとティアンにも犠牲がでるよ？』

はあ……………。

「若者に背中を押されるとは、老いましたかね」

いい加減ワタシも覚悟を決めよう。

「先のカレはキレていたそうですが本音を漏らすと、ワタシだってとうの昔から……………ブチ切れていましたよ」

店を爆破されたとき、ティアンが死んでいたら。

多分ワタシは立ち直れないだろう。

救いたいなら救えばいい、そう言ったのはああ、ハマチだったか。あの言葉にワタシは救われた。だからワタシもカレが好きなのこの街に恩を返——いや、違うな。

ワタシも同じようにこの街が、ティアン人々が好きなのか。だから救いたいのか。
 なら宣言しよう。

「今この時よりワタシは、神の御言葉を語る私ミケールではなく、【神】の名を騙R・レプロブスるワタシとしてアナタの前に立ち塞がろう」

嗚呼、ワタシは偽善者かもしれない。嘘吐きと呼ばれても構うまい。ワタシに偉大なる主ほどの器量はない。

それでも、矮小なる身を【神】と偽ってでも、ワタシに救わないという選択肢は存在しない。ワタシも人神と獣の間、人間なのだから欲望の一つや二つあってもいいだろう。「覚悟しろ、勇猛にして邪知持つケダモノよ。ワタシが今から審判こを下す」

『GOROOOOOOOOOOOWUOOOOO!!』

特典武具？ いらぬ。

名誉？ いらぬ。

欲しいのは誰もを救える力だけ。

さあR・レプロブス。主を投げ捨ててまで戴いたその座から、生きる意地を見せろ。

ワタシは非戦闘職、正面から戦ってワタシの力では勝てる訳も無い。考え方を変えよう。膨大な体力と堅固な防御が抜けないなら、搦め手か。《大神賽》なら状態異常を掛けられるかもしれないが、範囲が広すぎて街に被害が出かねない、却下。原点に戻って《絵札の騎士団》を「ゴルゴタ」で強化して——いや、ダメージが徹るのに最低限ストレイト以上なんて、運以前の問題に揃えるカードが足りなくなる。そもそも相手がカウンター特化のこのパターンではあまり良くない。却下。

……カウンター？ 待て、あの《粉塵》は何を原料にしている？ ワタシの力では勝てない？

何か繋がりそうだが、まだ足りない。【遊神】だけに固執しては駄目か。神は神だけでは神に成り得ないか？ つまり——。

「見えましたね」

限りなく細かい勝ち筋だが、これが一番可能性が高い。

「《紅黒大回転》
スピン・ルーレット」

『GURUWO?!』

傘を開くように幾重にも重なるルーレット盤が「マイエルン」を包み込む。

さて、一世一代の大勝負に賭けましょう。ベットは互いの命。申し分ないデスゲー

ム。

包围を爆破して逃げ出そうとしたのか、ドンツと腹に響く和太鼓のような爆発音を号砲に、一斉にルーレット盤が回り始める。

ワタシが「マイエルン」に勝つにはこれしかない。ただでさえ地力で負けているのに、その上相手はカウンターまで使える。勝つ方法なんて、『カウンターをカウンターし続ける』しかないじゃないか。

あのルーレット盤に当たったダメージと衝撃は、ルーレットの結果によつて振り分けられる。黒なら敵に、赤ならワタシに。本来のルールとは異なるが、許されるのはゲームのルールすら歪める「遊神」こそだろう。

そして「マイエルン」は衝撃が加わると、完全なオートでカウンターが発動する。つまりは。

「アナタも止められないのでしょうか？ そのカウンター機能は」

始まってしまえば「マイエルン」にはどうしようもない。カウンターがカウンターを呼び、それをまたカウンターするサイクル。ワタシのMPが底をつくまで止まらない。そして、爆発の元は「マイエルン」自身の体積から作られた《粉塵》。体積が消失してもなお生存できるモンスター、いや生命などいるのですかね？

だが、ワタシは一度でも負ければ死亡。アチラは何万回耐えるだろうか。

しかしそれがなんだ。必要なら何万回だろうが何億回だろうが勝ってみせよう。ワタシは【遊神】なのだから。

「やはり消費が早いですねえ」

何分経っただろうか。いくらルーレットに勝っていても元手^Mが無ければ話にならない。そもそも【遊神】のステータスなどほぼLUCしか増えない。

だから、【遊神】ではない。ジョブを利用する。

「《トランスファークラック》」

5万以上あるLUCを徐々にMPに移し替える。使ったのはワタシがサブジョブに持つ【信奉者^{ベリバー}】のスキル。【信奉者】はLUCが上がりやすいというだけで取っていたが、まさか役に立つ日が来ようとは。

もちろん弊害もある。LUCを移している際は、減った値で計算されてしまう。大抵の「ヘマスター」なら問題ないが、【遊神】はLUCあってこそそのジョブ。勝率は低下するだろう。

それでも引き下がる訳にはいかない。

ワタシは救わなければならないから。

「ワタシも、弱い人間ですわ……」

自分を嘲笑った拍子に気を緩めてしまったのか。

一つ、鮮烈な赤色がやたら目に付いた。

「しまっ——」

音も無く、とてつもない衝撃に体を投げ出され、ワタシの中でパリンと何かが砕けた。

「……………無謀な賭けでしたか」

『Gorururu』

ワタシがルーレット盤を生成できなくなったせいで囚われていた「マイエルン」が姿を現す。チワワほどのサイズにまでなっていたが、倒せなかったのだからワタシの負けだ。

あくまでワタシの、だが。

「後は」

『オツケー。もう休んでな。爺さんも疲れたでしょ』

即席の修理が終わったのか、変わらずに超音速で〈ブルーオペラ〉が駆ける。

『GURUURUURUURUURUURUURUURUURU!!』

それに怯え、決死の表情で《粉塵》を撒き散らす「マイエルン」を前に、AR・I・C

Aは急停止した。

『最後の自爆スイッチを押し続けてくれてありがとう！ それじゃあ死んでね！』

「何を言っているかわからない」。獣の顔なのに、そう聞こえた気がした。だがカノジヨの発言はこれ以上無いほど正しい。

『最初つから不思議だったんだ。自分を巻き込んで爆発をしてみると、どうやって防いでるのかなってさ。やつとタネが分かったんだ。あんた、自分の攻撃にも迎撃してるとじゃない？』

炎熱に対しては耐性で防げるだろう。だが衝撃は？ まさか物理攻撃が無効な訳もあるまい。それならカウンターなんて意味が無い。その分のリソースを攻撃手段やステータスに回した方が有効だ。

なら何故「マイエルン」だけはその爆発の中で無事だったか。カノジヨの言うとおり、自らの攻撃すらカウンターしていたのだ。おそらく《粉塵》は2種あり、一つは攻撃用の威力の高い拡散型、もう一つは防御用の指向性を持った収束型。

『ここでクワイズ！ あたしの手元にへ叡智の三角▽謹製のお手軽手榴弾があります！ さて、これを投げるとどうなるでしょうか？』

アンサー、《粉塵》に誘爆する。

「マイエルン」が意思でカウンターを止められないのはルーレット盤が証明した。

なら、死力を尽くして攻撃用の《粉塵》を撒いた「マイエルン」に、防御用に割けるだけの余力はあるだろうか？

『GURU……GROWWOOOOOOOOOO!』

考えが至つたらしき「マイエルン」が取り乱して駆けるが、自分で張つた致命の罠から抜け出せない。

『おいおいライオンが逃げるなんてみつともないぜ？ あたしが華々しく散らせてあげるから感謝しろよ』

そーれつ、と軽い掛け声で手榴弾が投げられる。

初めは閃光だった。

それが膨れ上がりやがて——炎が、爆裂する。

轟ツツツツ!!! 爆風は留まる事を知らず、遂に逃げ遅れた「マイエルン」をも呑み込む。そして。

『GOW——』

パンツと微かに弾ける音をワタシたちの鼓膜に残し、「マイエルン」の残り全体積は呆気なく消失した。

【轟傑獅頭 マイエルン】が討伐されました】

【MVPを選出します】

【「R・レプロブス」がMVPに選出されました】

【「R・レプロブス」にMVP特典【獅轟外套 マイエルン】を贈与します】

おや。トドメを刺したカノジョではなく、ワタシにMVPが回ってくるとは。

「足掻いてみるものですねえ……」

足元の砕けた【救命のプローチ】を摘みあげろ。コレが無ければ吹き飛ばされて死んでいた。最近は一度たりとも砕けた事は無かったのに、余程運が悪くなっていたのか。

『お、爺さん生きてたんだ。あたしにアナウンスが来ないから予想はしてたけど。で、特典武器はどんな感じ?』

先ほどアナウンスがあつたアレのことか。贈与された暖かい色合いのコートを羽織る。毛触りは少し固いが、ゴワゴワしている印象を受けるほどではない。

「性能は悪くないでしょうが、使いませんね」

『ええーもつたいない……』

「そもそもワタシはあまり戦いません。今回がおかしいんです。袖元のファーもカードを持つ時に邪魔ですし」

『古代伝説級〈UBM〉倒しといてよく言うねー。あ、誰か来る』

ザクザクと砂を踏み分け接近してきたのは。

「お怪我はないですか!」

「……キミでしたか」

何人かの〈マスタ―〉と衛兵を連れてきたライモンド君だった。もう少し早ければワタシがこんな無茶をしなくて済んだのに、はあ……。

「心配しなくともワタシは無事ですよ」

『爺さんが〈UBM〉倒しちやったしね』

「流石です先生!」

キラキラした瞳で見つめられても、本当に運が良かったとしか言えない。ある意味実力とも呼べないのかもしれないが、呼んでしまうのは戦闘職の人々への冒瀆に思える。

「これもお返ししますね」

手渡される金の十字架は、もはやどこか懐かしい。そして無償にありがたかった。我らが崇める天上の主よ、やはり私はまだあなたの所へは届かないようです。けれどワタシにも救える物がありました。

どうか今暫く、ワタシにアナタのご加護を。

情報まとめ

くマスター編く

キング・オブ・アナウンズ
【報道王】ハマチ

エンブリオ：「古今続在 アツシユールバニバル」

TYPE：フォートレス（白亜の巨大建築物）

保有スキル：

《情報蒐集》^{データ・スクラップ}：半径五キロ以内の事態を館内の書物に記す。範囲にリソースが割かれてい
るため、レベルの高い《隠蔽》等だと抜けない。また情報量が多すぎる弊害として、検
索を掛けないと欲しい情報は手に入らないし、定期的にいらなくなった情報は削除しな
いと使い物にならない。

《偽史は飾られ正史と為る》^{アツシユールバニバル}：必殺スキル。結界の設定、監視カメラ、過去のログ、儀式
等々を改変する。改竄出来るのは《蒐集》の効果範囲内のみであり、時間も掛かる上に
この間《蒐集》は使用不可。ただ、《隠蔽》を施した結界等も結界自体の存在が認識でき
れば改変できる。レベル50以下でも闘技場に行けるね！ グローリアの絶死結界と
同様に常時補完されるタイプならば常に改竄し続ける必要もある。

ジヨブスキル：

《全世界放送》：ユニバーサル・レポート

アクティブ。「報道王」奥義。距離制限なく声と映像を不特定多数に配信する。配信箇所の数・距離により消費は増すが、そこまでの負担にはならない。実は「ブレイメン」のような音響系や一部邪眼系と組み合わせると、超広域殲滅&p;制御を兼ねる仕様。

備考：(D I N) ヘルマイネ支部局長。通称：人間大好きマニア。統計採つてニヤニヤするタイプ。基本引き籠もつて館内から出てこないが上司としては有能な方で、新人記者の研修先選ばれやすい。最近の悩みは「アッシュールバニバル」のスクショを誰かがネットにアップしたせいで、ちよつとした名所みたいになつてゐること。

【超測量士】S A R

エンブリオ：【界見玉座 フリズスキャルヴ】

TYPE：ギア・カリキュレーター（玉座&p;小型衛星）

保有スキル：

《天上視点》：ヘブンズサイト：監視衛星の運用。常時MPの補給必須。

《平行移界》：パラレルソフト：フリズスキャルヴの視界モードを切り替える。一度に一種のみ。

ジヨブスキル：

《マッピング》：【測量士】のスキル。座標ごとに地図を制作、レベル最大では構成物の詳

細も表示されるようになる。

備考：〈DIN〉グランバロア支部局長。元・情報版閣下（笑）。エンブリオからも察する通り、全てを下に見る傲慢小僧だったのが、スクープ撮つたら記録は改竄されるわ証人いなくなるわといった風に、他局長数人掛かりでプライドをバッキバキにされて改心。実生活にも好影響が出た模様。今は比較的まとも。

マスターマインド プラックボックス
【黒幕】

エンブリオ：〔伝天虫 サルタヒコ〕

TYPE：アドバンス・レギオン（羽虫の群れ）

保有スキル：

《道祖神の加護》：全ての障害物を無視して飛行する。一体あたりのコストは《消の術》に比べると結構軽い。このスキルがリソースを食うためにステータスが貧弱。弱めの毒を飲めば死に、体を強打すれば肉に潰されて死ぬので、基本的にバトルジャンキーなマスターの体内では三日生存することが稀。

《獅子身中の虫の知らせ》：人型範疇生物の体内に侵入し、ログを閲覧。なおこの時マスターも同期して見ている。

《人の不幸を蜜として》：マスターの体積を同体積のサルタヒコに置換し、固有スキルのコストを半減。

ジヨブスキル：

《変装》：【密偵】^{スパイ}【諜報員】^{エージェント}のスキル。SP消費で外見を変える。高レベルの《看破》で普通ならは見破られる。

《一切架空》：【黒幕】奥義。パッシブ。自分の本名を認識していない相手からの《看破》等を完全に弾く。

備考：〈D I N〉特派員（ただし権限は局長級）。他人の散る様に風情を感じる、迷惑な永劫的刹那主義者。他局長のような特定の居場所を持たず、あちらこちらへ飛び回る。同僚以上でなければ《一切架空》のせいで名前も知らない不審者。しかも同僚は名前を呼ばない。何故って？ 盗聴盗撮の怖さは自分たちが一番知ってるからさ。こいつのせいで一部局長は定期的に虫下しの毒を飲む羽目になっている。

【神筆家】^{ゴッドライター} ムシヤパス

エンブリオ：【緋文顕筆 ヒトコトヌシ】

TYPE：アームズ（紅い毛筆）

保有スキル：

《言霊硯》：レベル・経験値・ドロップアイテム e t c。全てを無形のリソースに還元し、

『墨』を生み出す。

《言霊綴り》：《言霊硯》で作った墨で文字を書き、現実に反映させる。一文字に込められ

るリソース上限は決まっており、より大規模な現実改変を行う場合は長文が必要となる。加えてその万能性故に特化よりも効率が非常に悪く、第一形態で約80倍。第六でも特化型の約10倍というコストの酷さ。

《二度と云わねど》：三十秒間リソースを前借りして《言霊綴り》が使用可能。ただし、使用したリソースを全て補填するまで《言霊綴り》は再使用禁止。リソースのキャッシュユカード的な。

ジヨブスキル

《神速筆》：【神筆家】奥義。《神域抜刀》に類似。執筆時（非武装）のみAGIを500倍。【文豪】や【作家】のスキル《速筆》の最終形。

備考：DIN∨ヴァンデル Heim 支部局長、兼 DIN∨最高戦力。 // 夢想脚本 //。

普段の業務は〈叡知の三角〉などの研究を読みやすく書き起こしての出版。だが同格の局長や社長からの依頼があれば、即座に準〈超級〉トップクラスの理不尽さを発揮する。もつともリアルが売れっ子作家で忙しい上、コストは依頼者が払う約束なのであまり出番はない。燃費悪すぎるわ……。

【心理術士】ラファイル・ルティル

エンブリオ：【神装人理 タナハ】

TYPE：エルダーアームズ（銀の錫杖）

保有スキル

《聖体配与》：一日一回だけ互いの同意の上（口頭でも可）で人型範疇生物を【天使】に変性する。この時点で完璧な服従が決定。ジョブは失われるが、モンスターとしてのステータスとスキルを得る。これらは素体に依存。なお元が人なので《人化の術》は全員所持する。

《天軍の指揮》：配下天使のステータスを引き上げる。

《^{タナ}原典之^ハ巻》：配下天使のステータス合計値の十分の一と、全スキルを共有した天使を召喚。制限時間あり。

ジョブスキル

《マインド・ブレイク》：相手を【洗脳】する。マスターでも、しばらく体が勝手に相手の指示通りに動く。

備考：元〈D I N〉エンジニアック支部局長。現在は【黒幕】によつて“監獄”に送られ、エンジニアック支部自体も解体。通称：洗脳貴婦人。

【^{ザ・}遊神】R・レプロブス

エンブリオ：【丘聖済民 ゴルゴタ】

TYPE：テリトリ

保有スキル：

《万世ゴの咎ルは赦ゴされるタ》：(自分の残りHPパーセント)×100)を固定値で味方ステータスに三分のみ追加。発動条件は自分の死亡。ダメージ軽減アイテムは無効。

《莊嚴なる復活》：HPが77%以上の状態から即死した場合のみ発動。ごく低確率で蘇生。

《安らかなる領域》：味方のヘイト値を減少。レベルの低い《気配探知》等のスキルに見つからなくなる。

《聖なる祝福》：自分がダメージを負った際、テリトリー内の味方の体力がダメージの半分だけ回復。

ジョブスキル

《絵札ホーカー・ナイツの騎士団

》：トランプ五枚を媒体兼コストとして召喚。役の強さによって騎士の強

さも変動。

スピン・ルーレット

《紅黒大回転》：MPを消費してルーレット盤を生み出す。そこにダメージが発生した瞬間から回り始め、結果が黒なら敵が、赤なら自分がダメージを負う。維持にもコストが発生するため持久戦はキツイ。

備考：ヘルマイネ賭博連合会取締役。リアルラックお化け。

《アミューズメント・ファザー 娯楽神父》、

鬼札常在”。実は世界No.2のエリートゴッドファザー。なおシステム上のL

UCは五万越え。私営カジノ「ヘイコール・イコル」を経営。

〈 U B M 〉編

【轟傑獅頭 マイエルン】

種族：エレメンタル

能力：カウンター特化、爆撃

最終到達レベル：69

討伐MVP：【遊神】R・レプロプス

発生：認定型

備考：古代伝説級〈UBM〉。かつての【龍帝】紫龍人非によって力を生かせずに封印されていた。攻撃は全て「マイエルン」の意思に関わらず完璧にカウンターされるため強力無比な一撃で屠るのがベストだったのだが、カウンターを全てカウンターするとう暴挙の前に敢えなく倒された。ネーミング理由……獅子の頭が舞^{マイ}い^{エルン}得る^ン。以上。

MVP特典武具：【獅轟外套 マイエルン】

豪壮なる獅子頭概念を具現化した至宝。その身に迫る脅威を轟音と共に吹き飛ばす。

形状：外套

装備補正：HP+500、MP+50%

装備スキル：《獅子粉塵》《熱ダメージ無効》《寒冷適応》

【震海猿 フルナーラ】

種族：魔獣

能力：波動干涉

最終到達レベル：??

討伐MVP：??

【妖溶海鼠 ピリスネラ】

種族：エレメンタル

能力：液化化、液体操作

最終到達レベル：??

討伐MVP：??

【天網鬼 イジンガン】

種族：鬼

能力：捕縛、拘束

最終到達レベル：??

討伐MVP：??

【宝蝕珊瑚 エイバンデート】

種族：エレメンタル

能力：侵蝕、スキル封印

備考：一定範囲内の相手の宝——もつとも使用時間の長いスキルを《珊瑚侵蝕》に置き換える。時間が経つと体が【エイバンデート】に置換されていき、珊瑚になった場所は1秒ごとに本来の体の持ち主と【エイバンデート】の間で操作権がどちらにいくかがランダムで決定する。その乱数は侵蝕率によって変動し、全身が置換された時点から100%で【エイバンデート】に操作権が渡る。

最終到達レベル：??

討伐MVP：??

【戒光閃魚 ワットメック】

種族：魔魚

能力：盲目付与

最終到達レベル：??

討伐MVP：??